

CONEXIOBlackBear 取扱説明書



Ver. 2.0.3 2021 年 1 月 22 日

コネクシオ株式会社



変更履歴

Version	Data	Updates			
1.0.0	Oct. 10, 2019	初版発行			
1.0.1	Oct. 23, 2019	文言の微修正及び誤記修正を実施			
1.0.2	Oct. 29, 2019	文言の微修正及び追記を実施			
1.0.3	Oct. 30, 2019	仕様変更事項の修正を実施			
1.0.4	Nov. 11, 2019	WiFiAP 設定に関する制限事項の修正を実施			
1.0.5	Nov. 18, 2019	時刻設定に関する記述の修正及び追記を実施			
1.0.6	Nov. 28, 2019	WiFi 機能の仕様変更に対応して記述の修正及び追記を実施			
1.0.7	Dec. 9, 2019	WiFi 機能の仕様変更に対応して記述の再修正を実施			
1.0.8	Dec. 19, 2019	MCU Firmware 更新に関する注意事項を追記			
1.0.9	Dec. 20, 2019	文言の微修正及び追記を実施。			
1.1.0	Jan. 16, 2020	起動時の自動的な WiFi 機能有効化に関する記述を追記			
1.1.1	Jan. 22, 2020	ケーブル接続の記載を修正			
1.1.2	Apr. 1, 2020	Pre-installed ソフトウェアの表を修正 文言の微修正を実施			
		Resume 実行方法に関する記述を追記			
1.1.3	May 22, 2020	LTE Module 電源の OFF/ON コマンドに関する記述を追記			
		OSS に関する注意事項の追記を実施			
1.1.4	May 26, 2020	Pre-installed ソフトウェアの表を修正			
		Pre-installed ソフトウェアの表を修正			
1.1.5	May 28, 2020	Resume 実行方法に関する記述の一部追記を実施			
		文言の微修正及び追記を実施			
1.1.6	Jun. 4, 2020	USB I/F に関する記述の修正および追記を実施			
1.1.7	Jun. 12, 2020	GNSS Antenna の図を修正			
1.1.8	Jun. 29, 2020	車載用 Power Cable の図及びケーブル接続の文言を修正			
2.0.0	Sep. 1, 2020	これまでの問い合わせ事項を考慮して大幅な追加・修正を実施			
		仕様一覧表"Certification"および"CAN I/F"記載内容の修正を実施			
201	Oct 1 2020	CAN の仕様に関する記述の追記を実施			
2.0.1	000. 1, 2020	Resume 機能に関する記述の修正を実施			
		GNSS 機能に関する記述の修正を実施			
2.0.2	Nov. 4, 2020	付属品アンテナのコネクタに関する記述の修正を実施			
2.0.3	Jan. 22, 2021	exFAT ファイルシステムの mount に関する注意事項の追記を実施			



[CONEXIOBlackBear 取扱説明書 目次]

1.1.はじめに1
1.2.製品外観
2.製品仕様
2.1.筐体寸法図4
2.2.仕様一覧表5
2.3.ブロック図8
2.4.インターフェースレイアウト図9
2.5.付属品10
2.5.1.屋内用セット・車載用セット共通10
2.5.2.屋内用セットのみ
2.5.3.車載用セットのみ
2.5.3.車載用セットのみ
2.5.3.車載用セットのみ
2.5.3.車載用セットのみ
 2.5.3.車載用セットのみ
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20 3.4.起動(電源ON/ログイン/時刻設定/RTC) 22
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20 3.4.起動(電源ON/ログイン/時刻設定/RTC) 22 3.4.1.電源ON 22
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20 3.4.起動(電源ON/ログイン/時刻設定/RTC) 22 3.4.1.電源ON 22 3.4.2.ログイン 23
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20 3.4.起動(電源ON/ログイン/時刻設定/RTC) 22 3.4.3.時刻設定/RTC 23 3.4.3.時刻設定/RTC 23
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20 3.4.起動(電源ON/ログイン/時刻設定/RTC) 22 3.4.1.電源ON 22 3.4.3.時刻設定/RTC 23 3.5.Suspend – Resume 25
2.5.3.車載用セットのみ 16 2.6.OS および 主なpre-installedソフトウェア 18 3.本体使用方法(準備/起動/終了) 19 3.1.microSIMおよびmicroSD挿入 19 3.2.アンテナ装着 20 3.3.ケーブル接続 20 3.4.起動(電源ON/ログイン/時刻設定/RTC) 22 3.4.1.電源ON 22 3.4.3.時刻設定/RTC 23 3.5.Suspend – Resume 25 3.5.1.Suspend 25



3.6.終了 (電源OFF/再起動)	28
3.6.1.電源OFF	
3.6.2.再起動 (Reboot)	
4.インターフェース使用方法	30
4.1.Ethernet	
4.1.1.DHCP接続	
4.1.2.固定IP接続	30
4.1.3.DHCP/DNSサーバー機能	
4.1.4.RJ45 connector	
4.2.LTE	32
4.3.WiFi	34
4.3.1.アクセスポイントへの接続	
4.3.2.2.4GHz アクセスポイント設定	
4.3.3.5GHz アクセスポイント設定	
4.3.4.CONEXIOBlackBear 起動時の自動的なWiFi機能有効化	
4.4.Bluetooth	37
4.5.Serial	38
4.6.CAN	39
4.7.DI/DO	40
4.8.GNSS	42
4.9.USB	43
4.10.SD (Storage)	43
4.11.LED	44
4.11.1.USER LED	
4.11.2.WiFi/Bluetooth LED	45
4.11.3.LTE電波強度LED	45
4.12.USER Switch	46
4.13.CPU温度	46
4.14.SMS	47



5.OS更新 (初期化)	
5.1.OSのVersion確認方法	48
5.2.microSD Cardを使用したOS更新	48
5.2.1."SD_burn_EMMC"のダウンロード	
5.2.2.Install Media (microSD Card) 作成手順	
5.2.3.CONEXIOBlackBear 本体でのOS更新手順	49
6.開発用ツール	51
6.1.Debug Cable	51
6.2.Debug Port	52
7.注意事項	53
7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項	53
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 	53
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 	
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 7.2.2.WiFi(無線LAN)の周波数帯(2.4GHz帯) 	
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 7.2.2.WiFi(無線LAN)の周波数帯(2.4GHz帯) 7.2.3.WiFi(無線LAN)の周波数帯(5GHz帯) 	53 53 54 55 55 55
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 7.2.2.WiFi(無線LAN)の周波数帯(2.4GHz帯) 7.2.3.WiFi(無線LAN)の周波数帯(5GHz帯) 7.3.電波法 および 電気通信事業法対応 	53 54 555555 55
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 7.2.2.WiFi(無線LAN)の周波数帯(2.4GHz帯) 7.2.3.WiFi(無線LAN)の周波数帯(5GHz帯) 7.3.電波法 および 電気通信事業法対応 7.4.オープンソースソフトウェアに関する注意事項 	53 54 55 55 55 55 56 57
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 7.2.2.WiFi(無線LAN)の周波数帯(2.4GHz帯) 7.2.3.WiFi(無線LAN)の周波数帯(5GHz帯) 7.3.電波法 および 電気通信事業法対応 7.4.オープンソースソフトウェアに関する注意事項 7.5.海外での使用について 	53 54 55 55 55 55 56 57
 7.注意事項 7.1.安全に使用するための取扱注意事項 7.2.電波に関する注意事項 7.2.1.Bluetoothの周波数帯 7.2.2.WiFi(無線LAN)の周波数帯(2.4GHz帯) 7.2.3.WiFi(無線LAN)の周波数帯(5GHz帯) 7.3.電波法 および 電気通信事業法対応 7.4.オープンソースソフトウェアに関する注意事項 7.5.海外での使用について 7.6.保証事項 	53 53 54 55 55 55 55 55 55 55 55 55 55 55 55



[図表目次]

図1.1-1 IoT Gateway Concept	1
図1.1-2 CONEXIOBlackBear 活用ソリューション例	2
図1.2-1 CONEXIOBlackBear 外観 – 上面およびコネクタ端子側	3
図1.2-2 CONEXIOBlackBear 外観 - アンテナ端子側	3
図2.1-1 筐体寸法図	4
図2.3-1 ブロック図	8
図2.4-1 インターフェースレイアウト図	9
図2.5-1 Serial Cable	10
図2.5-2 DI/DO Cable	11
図2.5-3 CAN Cable	12
図2.5-4 Holeless EX-Door	12
図2.5-5 LTE Antenna	13
図2.5-6 WiFi/Bluetooth Antenna	13
図2.5-7 GNSS Antenna	13
図2.5-8 AC Adapter	14
図2.5-9 AC Adapter Conversion Cable	15
図2.5-10 4 in 1 Antenna/Cable	16
図2.5-11 Power Cable	17
図3.1-1 microSIM および microSDの挿入	19
図3.2-1 アンテナ装着	20
図3.3-1 ケーブル接続	21
図3.3-2 車載用電源ケーブル接続	21
図3.4-1 起動時のLED表示	22
図3.5-1 Suspend時のLED表示	25
図3.5-2 Resume時のLED表示	26
図3.6-1 終了時のLED表示	28
図3.6-2 Reboot (go-sys-reboot実行) 時のLED表示	29
図4.1-1 RJ45 connector LEDs	31
図4.5-1 Serialインターフェース切り替えスイッチ	38
図5.2-1 OS更新時のLED表示	50
図6.1-1 Debug Cable A	51
図6.1-2 Debug Cable B	51
図6.2-1 本体へのDebug Cable接続	52
図7.3-1 技術基準適合証明/認定情報 – 底面ラベル	56

	CONEXIO
	人をつなぐ、価値をつなぐ
図7.6-1 TAMPER SEAL	

表2.2-1	仕様一覧表	5
表2.2-2	モデル別型番	7
表2.6-1	OS および 主なPre-installedソフトウェア	18
表3.4-1	電源投入 - 起動 実行方法	22
表3.5-1	Suspend 実行方法	25
表3.5-2	Resume 実行方法	26
表3.6-1	終了 – 電源OFF 実行方法	28
表3.6-2	Reboot 実行方法	29
表4.1-1	Ethernet デパイス名	30
表4.1-2	リンク速度LED	32
表4.1-3	リンク状態LED	32
表4.2-1	LTE Module デバイス名	32
表4.2-2	LTE 有効化/無効化コマンド	33
表4.3-1	WiFi デバイス名	34
表4.3-2	WiFi 有効化/無効化コマンド	34
表4.4-1	Bluetooth デバイス名	37
表4.4-2	Bluetooth 有効化/無効化コマンド	37
表4.5-1	Serial通信 デバイスファイル	38
表4.5-2	Serialインターフェース切り替え設定	39
表4.5-3	終端抵抗設定	39
表4.6-1	CAN デバイス名	39
表4.7-1	DI/DO制御用ポート	40
表4.7-2	各ポートの機能設定	40
表4.7-3	PWR_CTLポートの設定値	41
表4.8-1	GNSS Module デバイスファイル	42
表4.8-2	NMEAメッセージ	42
表4.9-1	USB制御用ポートと設定値	43
表4.9-2	USB Memory デバイスファイル	43
表4.10-′	1 microSD Card デバイスファイル	43
表4.11-1	USER LED	44
表4.11-2	2 USER LED 制御方法	44
表4.11-3	3 WiFi/Bluetooth LED	45
表4.11-4	4 WiFi/Bluetooth LEDの点灯条件	45



人をつなぐ、価値をつなぐ

表4.11-5 LTE電波強度LEDの点灯条件	45
表4.12-1 USER Switch インプットデバイスファイル	46
表6.2-1 ターミナルエミュレータのシリアル通信設定	52
表7.3-1 技術基準適合証明/認定情報	56



1. 製品概要

1.1. はじめに

本書はエッジコンピューティング・ゲートウェイ CONEXIOBlackBear に関する取扱説明書です。本書では CONEXIOBlackBear の仕様や、本体および搭載されたI/Fの使用方法について記載しています。 CONEXIOBlackBear へ搭載するソフトウェアの開発方法に関しては別紙「簡易プログラミングマニュアル」を参照 して下さい。

※「簡易プログラミングマニュアル」は CONEXIOBlackBear ユーザー向けサポートサイトで入手可能です。

CONEXIOBlackBear は「図1.1-1 IoT Gateway Concept」に記載したように、多様なソリューションへ対応す るために多様な環境に設置された機器やセンサー等のデバイスを、インターネットを通してIoTクラウドのようなサー バーへと接続して、デバイスデータの有効活用や新たな価値を創造することを可能にするエッジコンピューティン グ・ゲートウェイです。



図1.1-1 IoT Gateway Concept

CONEXIOBlackBear には以下のような特長が有ります。

- エッジコンピューティング能力強化: QuadコアCPUおよびGPUを搭載して処理能力を強化したエッジコン ピューティング・ゲートウェイです。これによりクラウドを介することなく現場でのエッジAI処理実行が可能に なるなど、高性能かつ即時性を求められる用途にも活用することが可能です。
- グローバル対応:日本国内の"技適"や"PSE"だけではなく、世界各国・地域の電波関連法規や製品安全に関する認証を取得しており、日本国内で開発したシステムを再開発することなくそのまま海外展開することが可能です。(「7.5.海外での使用について」も参照願います)
- 車載対応:車載も想定した堅牢性、動作温度、動作電圧を確保し、CANインターフェース2系統および GNSSを標準搭載するなど、特殊車両や建設機械へも後付けでIoT化を図ることが可能です。これにより車 両の稼働分析や遠隔保守などを実現することができます。
- 多種多様なI/Fを搭載: Ethernet、LTE、WiFi、Bluetooth、RS485/RS422/RS232C(選択)、CAN(2系統)、 DI/DO、GNSSを標準搭載し、さらにWi-SUN、EnOceanなどのモジュールをオプションで追加可能(予定)で あり、多種多様な機器やセンサーと接続して使用することが可能です。



このように CONEXIOBlackBear はグローバルに、多様な状況へ対応することが可能です。 CONEXIOBlackBear の活用ソリューション例を「図1.1-2 CONEXIOBlackBear 活用ソリューション例」に記載 します。



図1.1-2 CONEXIOBlackBear 活用ソリューション例



1.2. 製品外観

CONEXIOBlackBear の外観を「図1.2-1 CONEXIOBlackBear 外観 – 上面およびコネクタ端子側」および「図1.2-2 CONEXIOBlackBear 外観 - アンテナ端子側」に記載します。



図1.2-1 CONEXIOBlackBear 外観 – 上面およびコネクタ端子側



図1.2-2 CONEXIOBlackBear 外観 - アンテナ端子側



2. 製品仕様

2.1. 筐体寸法図

CONEXIOBlackBear 本体の筐体寸法を「図2.1-1 筐体寸法図」に記載します。











図2.1-1 筐体寸法図



2.2. 仕様一覧表

CONEXIOBlackBear の主な仕様を「表2.2-1 仕様一覧表」に記載します。

表2.2-1 仕様一覧表

ITEM	DESCRIPTION	DETAILS		
CPU	FREESCALE/MCIMX6Q5EYM10AD	ARM Cortex-A9 1.0GHz Quad Core		
	222	Built-in GPU : Vivante GC2000		
Memory	DDR	DDR3, 2GB		
Main Storage	Storage	eMMC (MLC), 32GB		
OS	Linux Yocto	Linux Kernel Version : 4.9.88		
		NXP BPS Version : 4.9.88-2.0.0		
Ton Cover		Power : 1 color I ED (Blue)		
		TE : 3 color LEDs (green)		
		WiFi/BT : 2 color LEDs (Red/Green) combined into one		
		User : 2 color LEDs (Red/Green) combined into one		
Front I/O Functions	Power connector	4 pin x 1		
	RJ45 connector	10BASE-Te/100BASE-TX/1000BASE-T		
		Terminal : RJ45 x 1 (with 2 color LEDs)		
	USB connector	USB2.0 Type A x 1		
	Can Bus Vehicle signal connector	CAN x 2		
		Terminal : CAN_H,CAN_L,GND		
	O mint a sum a star			
	Serial connector	RS232C/RS485/RS422 (Isolated) X 1 (Select)		
	DI/DO connector	Extension board DL x 4, DO x 4, (COMMON [GND] x 2)		
Back I/O Functions	I TE Antenna	SMA connector x 2		
Buok i/o r unotiono	WiFi/Bluetooth Antenna	SMA connector x 1 (Reverse Type)		
	GNSS Antenna	Fakra connector x 1		
	Power OFF button			
	microSD Card	x 1 (microSDXC UHS-I SDR104)		
	microSIM Card	x 1		
	Serial Port Setting Switch	3 ports		
	Debug Port	x 1		
LTE	Interface	Mini-PCIe		
	Bands/Frequency	FDD-LTE : B1(2100MHz) / B3(1800MHz) / B8(900MHz) /		
	-	B26(800MHz,B18/19) (depends on JP)		
	Up/Downlink rate	Cat.4 Down 150Mbps / Up 50Mbps		
	· · · ·	(Ideal value of LTE Chipset)		
		SIM/600JC-H PCIE support docomo, SoftBank and KDDI		
	Antenna	With SMA connector for external antenna x 2		
GNSS	Module	u-blox NEO-M8N		
	Frequency	GPS L1C/A, SBAS L1C/A, QZSS L1C/A, GLONASS		
		L10F, BelDou B1, GALILEO E1B/C (Up to Module spec.		
		system)		
	Antenna	With Fakra connector for external antenna x 1		
WiFi / Bluetooth	Module	WM-BAC-BM25 (Broadcom)		
	WiFi Dual band	IEEE 802.11 ac/a/b/g/n		
	Bluetooth	Bluetooth 4.2 (Bluetooth Low Fnerav)		
	Blluetooth Profile	Depends on BlueZ		
	Antenna	With SMA (Reverse Type) connector for external WiFi +		
		Bluetooth Antenna x 1		



Power supply	Power supply voltage	Applied Voltage : DC12V or 24V		
		Car ACC/IG / Car BATT /GND : Total 3		
		Operation Voltage : 9~32V		
		Absolute maximum rated voltage : 0~40V		
	USB voltage	5V/0.5A (Power supply to USB device)		
Power	DC12V Current Consumption	MAX : about 1.5A		
Consumption		Suspend Mode : about 100mA		
		Leak Current : 2mA		
RTC battery	RTC backup battery	BCR1220 3V Lithium Coin Cell		
Environment	Operation temperature	-20°C~70°C		
	Storage Temperature	-30°C~80°C		
	Humidity	5% to 95% non-condensing		
	Environment	Compliant with ISO 16750-3, Class C.		
		(RJ45 and USB are only for testing to confirm there is		
		no problem in their ability value.)		
	Vibration	2.83G (ISO 16750-3)		
	Mechanical shock	50G (ISO 16750-3)		
	IP code	IP40		
Electrostatic	Survive ±10kV contact discharge and			
Discharge	± 10kV air discharge ESD testing			
-	(Criterion C)			
Certification	Compliant with Telec, VCCI, CE, FCC,			
	IC and NCC			
	(Up to LTE module chip certification,			
	CONEXIOBlackBear can apply for			
	TELEC, VCCI, NCC with SIM7600JC-			
	H PCIE, but other Certification is			
	related to the acquisition of regional			
	LIE module.)			
Mechanical	Dimensions	171.9mm x 114.0mm x 42.5 mm (w/o Flange)		
	Weight	600g ± 20g (Estimated)		
Accessories	Serial Cable	Cable with connector		
(Common)	DI/DO Cable	Cable with connector		
	CAN Cable	Cable with connector		
	Holeless EX-Door			
Accessories	LTE Antenna	SMA connector for external		
(Indoor set)	GNSS Antenna	Fakra connector for external		
	WiFi/Bluetooth Antenna	SMA (Reverse Type) connector for external		
	AC Adapter	AC Adapter & Conversion cable		
Accessories	4 in 1 Antenna/Cable	LTE x 2, GNSS, WiFi Antenna & Cable		
(Commercial set)	Power Cable	4 pins power cable		



CONEXIOBlackBear には屋内用のIndoorセットと車載用のCommercialセットが有ります。この2種類のセットの違いは付属品の違いだけです。(「表2.2-1 仕様一覧表 Accessories」の項を参照願います)

また対象となる国・地域別に"Jモデル"、"Aモデル"、"Eモデル"が有ります。LTE Moduleの対応周波数、WiFi の対応channel以外のCONEXIOBlackBear の構成は各国・地域対応モデル間で同一で、開発したシステムは 各モデル間共通で使用することが可能です。

それぞれのモデル別型番を「表2.2-2 モデル別型番」に記載します。

表2.2-2 モデル別型番

モデル	対象国·地域	屋内用/車載用	型番
ュエニッ		屋内用	MS-5776-JC-H Indoor
Jモナル 日本国内、古湾向け		車載用	MS-5776-JC-H Commercial
ヘエデル		屋内用	MS-5776-A-H Indoor
Aモアル 木国、カナタ向け		車載用	MS-5776-A-H Commercial
ビエデ ル	欧州、東南アジア諸国向け(※)	屋内用	MS-5776-E-H Indoor
ヒモナル		車載用	MS-5776-E-H Commercial

(※)対応国・地域は、下記URLの「対応国・予定国について」を参照願います。

https://conexio-iot.jp/serviceproduct/blackbear_faq.html

本書では日本国内および台湾向けの"Jモデル"を念頭に置いた記載をしておりますが、上記のように各モデル 間で動作するシステムは共通です。

各モデルは対象となるそれぞれの国・地域の認証を取得してありますので、必ず使用する国・地域での認証を 取得したモデルを使用して下さい。(「7.5. 海外での使用について」も参照願います)



2.3. ブロック図



CONEXIOBlackBear のブロック図を「図2.3-1 ブロック図」に記載します。

図2.3-1 ブロック図



2.4. インターフェースレイアウト図

CONEXIOBlackBear のインターフェースレイアウトを「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に記載します。





図2.4-1 インターフェースレイアウト図



2.5. 付属品

CONEXIOBlackBear には"屋内用セット (Indoor set)"と"車載用セット (Commercial set)"の2種類のセット が有り、一部の付属品が異なります。CONEXIOBlackBear の付属品を、2種類のセットに共通して入っている付 属品およびそれぞれのセットのみに入っている付属品に分けて以下に記載します。

2.5.1. 屋内用セット・車載用セット共通

"屋内用セット"および"車載用セット"共通に添付される付属品は"Serial Cable"、"DI/DO Cable"、"CAN Cable"、"Holeles EX-Door"の4品です。図2.5-1 ~ 図2.5-4 にこれらの付属品の詳細を記載します。



L25.324 E	RS-232C		RS-485 Half Duplex		RS-485/RS-422 Full Duplex	
ヒン番号	信 号 名	I/O	信 号 名	I/O	信号名	I/O
1	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND
2	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND
3	ISO_RXD	IN	DATA+	IN/OUT	TX+	OUT
4	ISO_TXD	OUT			RX+	IN
5	ISO_RTS	IN	DATA-	IN/OUT	TX-	OUT
6	ISO_CTS	OUT			RX-	IN
7	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND
8	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND	GND_ISO	GND

※空欄とGND_ISOで使用しないピンは未接続としてください。

1	UL1007 20AWG(21/0.178)TIN PLATED COPPER WIRE BLACK INSULATION(-40°C~+85°C) Ø1.8mm L=3010mm (RoHS)	4pcs
2	UL1007 20AWG(21/0.178)TIN PLATED COPPER WIRE GREEN INSULATION(-40°C~+85°C) Ø1.8mm L=3010mm (RoHS)	4pcs
3	HOUSING:(WSTP/N:PD08-I30002) 2*4P/M PH:3.0mm PA66 BLACK (RoHS)	
4	TERMINAL: (WSTP/N:I30002PS-2) PH:3.0mm PHOSPHOR BRONZE TIN-PLATED (RoHS)	
5	テドロン防水ラベル 80*10mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	1pcs
6	テドロン防水ラベル 35*15mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	8pcs

☑2.5-1 Serial Cable





ピン番号	信号名	I/O
1	DI1_I	IN
2	DO1_O	OUT
3	DI2_I	IN
4	DO2_O	OUT
5	GND	GND
6	GND	GND
7	DI3_I	IN
8	DO3_O	OUT
9	DI4_I	IN
10	DO4_O	OUT

1	UL1007 20AWG(21/0.178)TIN PLATED COPPER WIRE BLACK INSULATION(-40°C~+85°C) Ø1.8mm L=3005mm(RoHS)	2pcs
2	UL1007 20AWG(21/0.178)TIN PLATED COPPER WIRE BLUE INSULATION(-40°C~+85°C) Ø1.8mm L=3005mm(RoHS)	4pcs
3	UL1007 20AWG(21/0.178)TIN PLATED COPPER WIRE ORANGE INSULATION(-40°C~+85°C) Ø1.8mm L=3005mm(RoHS)	4pcs
4	HOUSING:(WSTP/N:PD10-I30002) 2*5P/M PH:3.0mm PA66 BLACK (RoHS)	1pcs
5	TERMINAL: (WSTP/N:130002PS-2) PH:3.0mm PHOSPHOR BRONZE TIN-PLATED (RoHS)	10pcs
6	テドロン防水ラベル 80*10mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	1pcs
\bigcirc	テドロン防水ラベル 35*15mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	10pcs

2.5-2 DI/DO Cable





ピン番号	信号名	I/O
1	CAN1_HI	IN/OUT
2	CAN1_LO	IN/OUT
3	CAN_GND	GND
4	CAN_GND	GND
5	CAN2_HI	IN/OUT
6	CAN2_LO	IN/OUT

1	UL2725(#24*1P+AL)*4P+E+AL BLACK PVC OD:6.3mm LENGTH:3010MM	1pcs
2	HOUSING:(WST P/N:PD06-I30002) 2*3P/M PH:3.0mm PA66 BLACK (RoHS)	1pcs
3	TERMINAL: (WST P/N:I30002PS-2) PH:3.0mm PHOSPHOR BRONZE TIN-PLATED (RoHS)	6pcs
4	H.S.T:Ø7.0*20*0.15mm BLACK (RoHS)	2pcs
5	H.S.T:Ø1.0*45*0.15mm BLACK (RoHS)	1pcs
6	テドロン防水ラベル 80*10mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	6pcs
\bigcirc	テドロン防水ラベル 35*15mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	6pcs

図2.5-3 CAN Cable



※標準では本体に"DI/DOコネクタ"用の穴が開いた"EX-Door"が取りつけられています。
 "Holeless EX-Door"はコネクタ用の穴が開いていない"EX-Door"で、EX-Boardを取り外した時などに、標準で取り付けられているEX-Door"と交換して本体に取り付けることができます。
 ※取り付けに際しては「7.6. 保証事項」にご留意いただき、必要に応じて「8. お問い合わせ先」にご相談ください。

図2.5-4 Holeless EX-Door



2.5.2. 屋内用セットのみ

"屋内用セット"のみに添付される付属品は"LTE Antenna" 2本、"WiFi/Bluetooth Antenna"、 "GNSS Antenna"、"AC Adapter"、"AC adapter Conversion Cable"の5品です。図2.5-5 ~ 図2.5-9 に これらの付属品の詳細を記載します。













GENERAL Notes	
INPUT	AC100-240V, 50-60Hz
OUTPUT	DC12V / 2A
COLOR	BLACK
	NEMA 1-15P, 2PINS AMERICA PLUG
AC INFOT FLOG	EN50075, 2PINS EUROPE PLUG
DC POWER CORD	UL2468 #24AWG x 2C
DC POWER PLUG	ϕ 5.5 x ϕ 2.1 x L11.5mm TUNIGH FORK TYPE
CABLE TIE	CABLE TIE (WITH-STEEL)
CORE	RH- ϕ 10.5 x ϕ 5.5 X 20mm OR EQUIVALENT
TOTAL WEIGHT	ABOUT 135g

※PLUG部分を交換して各国・地域に対応するタイプのAC Adapterです。

図2.5-8 AC Adapter







1)	UL2464 18AWG*3C(赤*2 / 黒*1) PVC	1pcs	
<u> </u>	_ 黒色(-40℃~105℃)(RoHS) L=270±5MM		
0	HSG:PH4.2mm 2*2P/M NYLON66	1000	
Ľ	透明(WST P/N:P4-I42002)(RoHS) または同等品	TPCS	
0	TER:PH:4.2mm適用18#~24#線材,真鍮錫メッキメス端子,	4	
3	(WST P/N:142002BS-2)(RoHS) または同等品	4pcs	
	DC JACK:ID:5.5*2.1mm OD:7.0mm L=17.5mm ABS	1000	
4	BLACK INSULATOR BRASS NICKEL PLATING (RoHS)	TPCS	
(5)	INNER MOLD:LOW DENSITY PE CLEAR (RoHS)	AR	
6	OVER MOLD:PVC 45P BLACK(-40°C~105°C) (RoHS)	AR	
	テドロン防水ラベル 80*10mm	4	
\mathcal{O}	Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	ipcs	
8	黒熱収縮スリーブ:Ф1.5*0.13(T)mm*6mm EVA 赤燐非含有 (RoHS)	1pcs	
9	黒熱収縮スリーブ:Ф5.0*0.13(T)mm*20mm EVA 赤燐非含有 (RoHS)	1pcs	

※この変換ケーブルを使用してAC Adapterを本体の電源コネクタに接続します。

図2.5-9 AC Adapter Conversion Cable



2.5.3. 車載用セットのみ

"車載用セット"のみに添付される付属品は"4 in 1 Antenna/Cable"、"Power Cable"の2品です。 図2.5-10 および 図2.5-11 にこれらの付属品の詳細を記載します。





図2.5-10 4 in 1 Antenna/Cable









-		
1	電子線:UL1007 18AWG(34/0.178), 錫メッキ銅 OD:2.1mm, PVC絶縁(-40°C~105°C) BLACK (RoHS) L=2990±5mm	1pcs
2	電子線:UL1007 18AWG(34/0.178), 錫メッキ銅 OD:2.1mm, PVC絶縁(-40°C~105°C) RED (RoHS) L=2990±5mm	
3	ヒューズホルダー: BLACK+電子線 (AVS0.8 黄色L1=2870mm / L2=100mm) 全て(RoHS)	1pcs
4	ブレードヒューズ: 32V 5A 黄褐色 (P/N:MIN-N5) (RoHS)	
5	HSG:PH4.2mm 2*2P/M NYLON66 透明色 (WST P/N:P4-I42002) (RoHS) または同等品	1pcs
6	TER:PH:4.2mm適用18#~24#線材, 真鍮錫メッキ メス端子, (WST P/N:l42002BS-2) (RoHS) または同等品	4pcs
7	テドロン防水ラベル 80*10mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	1pcs
8	テドロン防水ラベル 35*15mm Silver地Black文字 フォントTimes New Roman (RoHS)	3pcs

図2.5-11 Power Cable



2.6. OS および 主な pre-installed ソフトウェア

CONEXIOBlackBear に搭載されているOSおよび主なpre-installedソフトウェアを「表2.6-1 OS および 主な Pre-installedソフトウェア」に記載します。

主なユーティリティツールとしてはbusyboxを使用しています。オープンソースソフトウェア(OSS)の使用においては「7.4. オープンソースソフトウェアに関する注意事項」に記載した事項にご留意願います。

Na	Catagony	Nama	Version
<u>NO.</u>	Category		Version Kornol : 4.0.99 Voeto : rocko (2.4.2)
<u> </u>	Driver	ETDI Sorial drivor	Keiner. 4.9.00 focio. locko (2.4.2)
2	Dilvei	dob	-
	Package Manager	ant	1 2 24
5	Init	systemd	234
6		sudo	1.8.20n2
7		locale	2.26
8		sed	1220
<u>q</u>		less	487
10		expect	5 45
11		minicom	271
12		screen	4.6.1
13	Utils	vim-tinv	8.0.983
14		dosfstools	4.1
15		util-linux	2.3
16		rsvslog	8.29
17		bash-completion	2.7-r0
18		man	1.6g-r1
19		dialog	1.3-20160828-r0
20		cpufregutils	008-r5
21		usbutils	008-r0
22		i2c-tools	3.1.2-r0
23	Device	evtest	1.33+AUTOINC+ab140a2dab-r0
24		bluez	5.49-r0
25		canutils	4.0.6
26		iptables	1.6.1
27		networkmanager	1.4.4
28		modemmanager	1.6.4
29		net-tools	1.60-26
30		avahi-daemon	0.6.32
31		avahi-autoipd	0.6.32
32		ntpd	4.2.8
33		lighttpd	1.4.45
34	Network	curl	7.54.1
35		wget	1.19.1
36		traceroute	2.1.0
37		iputils-ping	20151218
38		Iputils-arping	20151218
39			9.10.5
40		mosquillo-clients	1.4.14 7.5m1
41		openssh-client	1.02m
42		bundlor	1.0.211
43			5.3.4
44			7.3
45		gee a++	7.30
47		nython	2 7 13-r1
48		python3	353
<u>40</u>	Development	python-pip	9 0 1-r0
50		perl	5.24 1
51		aooale-aloa	0.3.4
52		sodium	1.0.11
53		zmg3(ZeroMQ version3)	4
54		googlegflags	2.2.0
55		opopoy	101

表2.6-1 OS および 主なPre-installedソフトウェア



3. 本体使用方法(準備/起動/終了)

本章では、CONEXIOBlackBear 本体の起動前の準備から電源の投入、そしてLinuxシステムを終了させて電源を落とすまでの基本的な操作について記載します。

3.1. microSIM および microSD 挿入

「図3.1-1 microSIM および microSDの挿入」に示した"SD-Door"を固定してあるネジを外し、必要に応じて microSIMおよびmicroSDを挿入します。挿入する際には"SD-Door"上部に印刷したマークを参照して、挿入スロットや挿入方向を間違えないように注意して下さい。特にmicroSIMの抜き差しは、microSIMの破損や誤動作を 避けるために必ず電源を落とした状態で行って下さい。

確実に挿入されたことを確認して、"SD-Door"をネジ止めして固定します。



図3.1-1 microSIM および microSDの挿入



3.2. アンテナ装着

「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示した"アンテナ端子面"の各アンテナ端子に、必要に応じてLTE、 WiFi/Bluetooth、GNSSアンテナを装着します。

LTEアンテナ端子とWiFi/Bluetoothアンテナ端子は両方ともSMA端子ですが、WiFi/BluetoothアンテナのSMA 端子はリバースタイプなので、取り付け位置を間違えないように注意して下さい。GNSSアンテナ端子(筐体の印 刷表記は"GPS ANT")はFacra端子です。

屋内用セットにおいて、LTEアンテナを2本ではなく1本だけ装着する場合は"LTE ANT MAIN"と印刷されている側のアンテナ端子に装着して下さい。ただし1本だけしか装着しない場合は特性が確保できない可能性が高いため推奨いたしません。

車載用4in1アンテナの接続は、ケーブルに貼ってあるラベルを参照して接続して下さい。("LTE SUBアンテナ" のケーブルは"AUX"と記載されているケーブルです)



図3.2-1 アンテナ装着

3.3. ケーブル接続

「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示した"コネクタ面"の各コネクタに、必要に応じてEthernetケーブル、 Serialケーブル、DI/DOケーブル、CANケーブル、USBケーブルを接続します。

Serialケーブル、DI/DOケーブル、CANケーブルの端子には抜け止めが付いています。奥までしっかりと差し 込んで抜け止めが本体側コネクタの爪と噛み合っていることを確認してください。

屋内用セットのACアダプタは、変換ケーブルを介して CONEXIOBlackBear に接続します。ACアダプタの変換ケーブルも接続してかまいませんが、「3.4. 起動 (電源ON/ログイン/時刻設定/RTC)」に記載したように、電源を投入すると CONEXIOBlackBear が起動します。本当に起動したい時までは誤って電源を投入しない(ACア ダプタを電源に接続して通電しない)ように注意して下さい。

車載用セットの車載用電源ケーブルは、黄色の線をバッテリーのプラス端子へ、黒色の線をバッテリーのマイ ナス端子へ、赤色の線をACCまたはIG電源端子へ接続して下さい。黄色の線の途中には5Aのヒューズが取り 付けられています。





図3.3-1 ケーブル接続



図3.3-2 車載用電源ケーブル接続



3.4. 起動 (電源 ON/ログイン/時刻設定/RTC)

3.4.1. **電源 ON**

表3.4-1 電源投入 - 起動 実行方法

対象セット	電源投入方法
屋内用セット(ACアダプタ変換ケーブル使用時)	ACアダプタを接続して通電する
車載用セット(車載用電源ケーブル使用時)	ACC/IG電源をONにする





電源を投入するだけで CONEXIOBlackBear が自動的に起動して、システムおよびインストールされている アプリケーションが立ち上がります。

屋内用セット(ACアダプタ変換ケーブルを使用している場合)の電源投入はACアダプタを接続して通電します。 車載用セット(車載用電源ケーブルを使用している場合)の電源投入は、車載用電源ケーブルをバッテリー等の 電源に接続した後、ACC/IG電源をONにします。

CONEXIOBlackBear に電源が投入されると、「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示した"トップカバー 上面"のLEDが全て点灯した後、電源LEDが点滅を始めて電源LED以外のLEDは数秒後に全て消灯します。 CONEXIOBlackBear の起動処理中は電源LEDの点滅が継続し、起動処理が完了すると電源LEDは点灯状態に移行します。電源LEDが点灯状態になればCONEXIOBlackBear を使い始めることができます。

すでに設定されている情報やインストール済みのアプリケーションなどを使用してそのまま運用する場合は、 上記のように電源を投入するだけで使用可能になります。



3.4.2. ログイン

システムを起動した後、ログインする場合に使用するユーザー名の初期値は"root"(superuser権限を持つユ ーザー)です。**工場出荷後に初めてログインする場合には、新しいパスワードを設定するように求められます**ので、 画面の指示に従って適切なパスワードを設定して下さい。

セキュリティを確保するため、適切なパスワードの管理やユーザー権限設定の実施をしていただきますよう、く れぐれもご注意願います。

3.4.3. 時刻設定/RTC

CONEXIOBlackBear のRTCは内蔵電池でバックアップされており、設定した時刻は電源をOFFにしても保持 されます。内蔵電池はCR1220で、筐体内部の電池ホルダーに装着されており交換が可能です。

設定されている時刻やタイムゾーンはtimedatectlコマンドで確認することができます。

例) timedatectlコマンド実行例("timedatectl status"でも同じ結果が得られます)
 # timedatectl
 Local time: Thu 2019-07-11 07:56:56 UTC
 Universal time: Thu 2019-07-11 07:56:56 UTC
 RTC time: Thu 2019-07-11 07:56:56
 Time zone: Universal (UTC, +0000)
 Network time on: yes
 NTP synchronized: yes
 RTC in local TZ: no

※行頭の"#"はその行がLinuxの入力コマンドであることを示すために、Linuxのコマンドプロンプトを表しています。(この章以降も本書ではこの表記を使用します)

CONEXIOBlackBear のDefault設定では、Local timeはUTCとなっています。UTCからタイムゾーンを変更 する場合にも下記のようにtimedatectlコマンドを使用します。

例)使用できるタイムゾーンを確認した後、JSTに設定する場合
 # timedatectl list-timezones
 # timedatectl set-timezone Asia/Tokyo
 # timedatectl
 Local time: Thu 2019-07-11 17:10:11 JST
 Universal time: Thu 2019-07-11 08:10:11 UTC
 RTC time: Thu 2019-07-11 08:10:11
 Time zone: Asia/Tokyo (JST, +0900)
 Network time on: yes
 NTP synchronized: yes
 RTC in local TZ: no

CONEXIOBlackBear がネットワークに接続されている場合、"Network time on"が"yes"に設定されていれ ば、ネットワーク上のNTP Serverに対して時刻同期を実行して時刻が設定されます。時刻同期の実行が完了す ると"NTP synchronized"が"yes"になります。

※"Network time on"は、ネットワーク上のNTP Serverを使用して時刻同期を実行するか否かを表します。 CONEXIOBlackBear のdefaultは"yes"です。

※"NTP synchronized"は、NTP Serverを使用して設定された時刻か否かを表します。 ※NTP Serverやネットワークの状態によっては、時刻同期に数十秒かかる場合が有ります。



CONEXIOBlackBear が使用するdefaultのNTP Serverは、"time.google.com"です(time1.google.com~ time4.google.com が使用されます)。これを変更したい場合は、"/etc/systemd/timesyncd.conf"に使用する NTP Serverを設定して下さい。(NTPがメイン、FallbackNTPが予備です。予備として複数のNTP Serverを設定 する場合は半角スペースで区切ってください)

NTP Serverの設定を有効にするためには、CONEXIOBlackBear を再起動するか、以下のコマンドで時刻同期デーモンを再起動して下さい。

systemctl restart systemd-timesyncd

NTP Serverを使用せずに手動で時刻を設定することも可能です。ただし"Network time on"および"NTP synchronized"が両方とも"yes"になっている場合は手動での時刻設定はできません。この場合は、以下のように "timedatectl set-ntp"コマンドを実行して"Network time on"を"no"にしてから、"date"コマンドや"timedatectl set-time"コマンドで時刻を設定して下さい。

- 例) NTP Serverを使用せずに手動で2019年10月25日 13時39分00秒に設定する場合
 - # timedatectl set-ntp no (パラメータの"no"は、"0"または"false"でも可能です)
- # date -s "2019-10-25 13:39:00"

手動で時刻設定ができる状態から、NTP Serverを使用して時刻設定を実行する状態へと設定を変更する場合は、以下の"timedatectl set-ntp"コマンドを実行して、"Network time on"を"yes"にして下さい。

timedatectl set-ntp yes (パラメータの"yes"は、"1"または"true"でも可能です)

時刻を設定/補正した後、必要に応じて下記のようにhwclockコマンドを使用してRTCへ時刻を設定して下さい。

例) システムクロックのローカルタイムをRTCのUTCとして設定する場合# hwclock -w -u

※RTCがUTCではなく、JST等のローカルタイムで設定されている場合、予期せぬLinuxカーネルのバグを 引き起こす可能性が有ることが広くアナウンスされています。RTCはUTCで設定することを強く推奨いたし ます。

逆にhwclockコマンドを使用してRTCのUTCをシステムクロックのローカルタイムとして設定する場合は下記の通りです。

例) RTCのUTCをシステムクロックのローカルタイムとして設定する場合。 # hwclock -s



3.5. Suspend - Resume

3.5.1. Suspend

表3.5-1 Suspend 実行方法

Suspend手段	操作方法
Linuxコマンド	"go-sys-suspend"コマンドを実行する



図3.5-1 Suspend時のLED表示

CONEXIOBlackBear は、"go-sys-suspend"コマンド(CONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)を実行する ことにより"Suspend Mode"に入ります。

"Suspend Mode"に入ると、CONEXIOBlackBear での処理状態をメモリ上に保持したまま、MCU(電源管理 プロセッサ)以外のプロセッサや周辺I/Oデバイスなどは低消費電力の状態に移行します。

"Suspend Mode"開始時にはトップカバー上面の電源LED以外の全てのLEDが2回点滅し"Suspend Mode" 中は電源LEDがゆっくりと点滅を続けます。



3.5.2. Resume

表3.5-2 Resume 実行方法

Resume手段	操作方法
USER SW	USER SWを押す
SMS	LTE経由でSMSを受信する
RTC alarm	rtcwakeコマンド等でResumeのタイミングを指定する



図3.5-2 Resume時のLED表示

"Suspend Mode"からResumeする方法には、以下の3種類が有ります。

- ・「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示した"USER スイッチ(USER SW)"を押す。
- LTE経由でSMSを受信する。
- ・rtcwakeコマンド等でResumeするタイミングを設定しておく。

SMS受信を行うためには、SMS通信が可能な通信契約が必要ですのでご注意ください。「4.2. LTE」に記載したLTE接続設定が完了してLTEがすでに接続されている場合、SMSの受信は自動的に実行されます。 SMSに関する詳細は「4.14. SMS」を参照して下さい。

またOS V1.1.5以降では、CONEXIOBlackBear はRTC alarmの割り込みによって"Suspend Mode"から Resumeすることができるようになりました。

Resumeするタイミングは以下の例のように"rtcwake"コマンド等によって設定することが可能です。Resumeの タイミングを設定した後に"go-sys-supend"コマンドを実行して"Suspend Mode"に入ってください。

- 例) 2020年5月26日15時20分0秒にResumeを実行させたい場合
 - # rtcwake -m no --date "2020-05-26 15:20:00"
 - # go-sys-suspend



例) 1時間後にResumeを実行させたい場合

rtcwake -m no -s 3600

go-sys-suspend

※rtcwakeコマンドを使用する場合"-m"オプションで"no"を指定して、Resumeのタイミングを設定するだけにして下さい。"Suspend Mode"へ入るためには必ず"go-sys-suspend"コマンドを使用して下さい。
※rtcwakeコマンドの"--date"オプションで指定する時刻はシステムクロックの時刻で設定します。
RTCがUTCのままで、システムクロックがUTC以外のローカルタイム(JST等)に設定してある場合でも、
rtcwakeコマンドにおいてローカルタイムで設定した時刻でResumeが実行されます。

設定したResumeのタイミングを確認したい場合は、以下のコマンドを実行することにより"alrm_time"および "alrm_date"として確認することができます。

例) 設定したRTC alarmを確認したい場合

: 09:39:29
: 2020-05-25
: 15:20:00
: 2020-05-26

"Suspend Mode"からのResumeが完了すると電源LEDの点滅が終了して点灯状態へ移行します。Resume が完了すると"Suspend Mode"に入った時点からの処理が再開され、電源LED以外のLEDも"Suspend Mode" に入る前の状態に戻ります。



3.6. 終了(電源 OFF/再起動)

3.6.1. 電源 OFF

電源OFF手段	操作方法
Power OFF SW	10秒間以上長押しする
車載用電源ケーブル	ACC/IG電源をOFFにする
Linuxコマンド	"go-sys-off"コマンドを実行する





図3.6-1 終了時のLED表示

「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示した"Power OFFスイッチ"を10秒間以上長押しすることにより、 CONEXIOBlackBear が機能を停止して電源OFFが実行されます。車載用セットの車載用電源ケーブルを使用 している場合は、ACC/IG電源をOFFにしても電源OFFが実行されます

"Power OFFスイッチ"は誤って電源がOFFになってしまうことを避けるために、"アンテナ端子面"に設けた窪 みの中に埋め込まれています。そのため指や爪では押しにくい場合が有ることをご了承願います。必要に応じて 細い棒状のもので押すようにして下さい。

CONEXIOBlackBear の終了処理実行中は電源LEDが早く点滅し、終了処理が全て完了すると電源LEDが 消灯して電源がOFFになります。思わぬ不具合や故障を避けるために、電源ケーブルやACアダプタを抜く場合 は電源LEDが消灯してから抜いてください。

ACアダプタを使用している場合で、すぐに電源を再投入する必要が有る時の電源遮断は、本体~ACアダプタ間(「図2.5-9 AC Adapter Conversion Cable」のどちらかのコネクタの抜き挿し)で行うことを推奨いたします。

ACアダプタへのAC100V供給を遮断することによって電源を遮断した場合、ACアダプタ内に蓄積されている 電流を CONEXIOBlackBear 本体を通して放電する必要が有ります。そのためAC100V遮断後約20秒程度は、 ACアダプタへのAC100V供給を再開しても電源供給が正常に行われず、CONEXIOBlackBear を起動すること ができません。ACアダプタへのAC100V供給を遮断した場合のAC100V再投入は、約20秒程度以上待ってから 行う必要が有りますので、ご注意下さい。



Linuxコマンドでシステムを終了させる場合は、shutdownコマンドやpoweroffコマンドではなく、"go-sys-off"コマンド(CONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)を使用して下さい。

shutdownコマンドやpoweroffコマンドでもシステムを終了させることはできますが、MCUと連携して電源や LEDを制御し、終了処理が実行状態であることをLEDで確認しながら終了/電源OFF処理を実行することができ る"go-sys-off"の使用を推奨します。

3.6.2. 再起動 (Reboot)



表3.6-2 Reboot 実行方法

図3.6-2 Reboot (go-sys-reboot実行) 時のLED表示

再起動のためのrebootコマンドも同様で、システムを再起動させることはできますが、"go-sys-reboot"コマンド (CONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)の使用を推奨します。

"go-sys-reboot"コマンドを使用するとMCUと連携して電源やLEDを制御し、終了処理中であるか起動処理中 であるかをLEDで確認しながら再起動処理を実行することができます。LEDの点滅/点灯パターンは、前述の終 了処理時および起動処理時のパターンを組み合わせたものとなっています。



4. インターフェース使用方法

本章では、「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に記載した CONEXIOBlackBear の各種インターフェースの基本的な使い方について記載します。

4.1. Ethernet

4.1.1. DHCP 接続

表4.1-1 Ethernet デバイス名

デバイス名
eth0

CONEXIOBlackBear のDefault設定では、CONEXIOBlackBear のEthernetコネクタにEthernet cableを接 続するだけで、DHCPでIPアドレスを取得してEthernetが使用可能になります。Default設定のEthernetコネクショ ン名は"Wired connection 1"です。

Default設定のままの状態では"/etc/NetworkManager/system-connections/"の下にはEthernetのコネクション情報がファイルとして保存されていませんが、Network Managerから変更等の管理を行うことが可能です。 Network Managerから変更をかけると"/etc/NetworkManager/system-connections/"の下に変更した内容で Ethernetのコネクション情報が保存されます。

Default設定のEthernetコネクション"Wired connection 1"を使用せずに、代わりにDHCPでIPアドレスを取得 するEthernetコネクションをNetwork Managerで新たに作成して使用する場合の例を下記に記載します。 Network Managerで管理可能なEthernetデバイスはeth0です。

- # nmcli connection down 'Wired connection 1'
- # nmcli connection delete 'Wired connection 1'
- # nmcli connection add con-name lan-eth0 type ethernet ifname eth0
- # nmcli connection up lan-eth0

 ※"lan-eth0"は、新たに追加作成するEthernetコネクション名の例です。
 ※Network Managerで新たに追加作成した場合には"/etc/NetworkManager/system-connections/"の 下に作成時に設定した内容でEthernetのコネクション情報が保存されます。

4.1.2. 固定 IP 接続

EthernetをDefault設定のDHCP接続ではなく固定IPアドレスで使用したい場合は、設定を変更する必要が有ります。例えばNetwork Managerを使用して設定を変更する場合の例を下記に記載します。

nmcli connection down 'Wired connection 1' # nmcli connection modify 'Wired connection 1' ipv4.method manual ¥ ipv4.addresses [IPADDRESS] ipv4.gateway [GATEWAY] # nmcli connection up 'Wired connection 1'

```
    ※'Wired connection 1'は、Defaultで設定されているEthernetのコネクション名です。「4.1.1. DHCP接続」
    に記載したように新たなEthernetコネクション名で固定IPアドレスのコネクションを作成することも可能です。
    ※"[IPADDRESS]"は、使用したい固定IPアドレスです。(例:192.168.21.117/24)
    ※"[GATEWAY]"は、使用したいDefault GatewayのIPアドレスです。(例:192.168.21.1)
```



4.1.3. DHCP/DNS サーバー機能

CONEXIOBlackBear には、標準でdnsmasqがプリインストールされています。このdnsmasqによってDHCP サーバーならびにDNSサーバー機能を実行することが可能です。

EthernetインターフェースでDHCP/DNSサーバー機能を実行するコネクションを作成するための設定例を下記に記載します。

nmcli connection add type ethernet ifname eth0 con-name eth_shared ¥
ipv4.method shared ipv4.addresses [NETWORK]

※"eth_shared"は、DHCPサーバーとなるEthernetコネクション名の例です。

※"[NETWORK]"は、使用したいネットワークのIPアドレスです。

例えば"192.168.9.1/24"を設定した場合、CONEXIOBlackBear のEthernet IPアドレスが192.168.9.1 となり、CONEXIOBlackBear にEthernet接続された機器に対して192.168.9.1/24ネットワークのIPアド レスが割り振られます。

※上記設定を行うとdnsmasqの機能によって同時に CONEXIOBlackBear がDNSサーバーになります。
※またiPv4ルーティングが有効になり、LTE<->Ethernet間の通信を実現するためのIPマスカレードを含む
iptablesへの登録が行われます。

。 これによりLTE接続が有効な場合は、上記の設定でEthernetインターフェースに接続された機器から LTEによってInternetへ出ることができるようになります。

4.1.4. RJ45 connector

Ethernet cableを接続するRJ45 connectorには「図4.1-1 RJ45 connector LEDs」に記載したように、 Ethernetの動作状態を示す2つのLEDが取り付けられています。それぞれのLEDが何を示しているかを 「表4.1-2 リンク速度LED」および「表4.1-3 リンク状態LED」に記載します。



図4.1-1 RJ45 connector LEDs



LEDの状態	リンク速度
消灯	10Mbps/Ethernet未接続
点灯:緑	100Mbps
点灯:オレンジ	1000Mbps

表4.1-2 リンク速度LED

表4.1-3 リンク状態LED

LEDの状態	リンク状態
消灯	リンクが確立されていない
点灯:黄	リンクが確立されている
点滅:黄	データの送受信が発生している

4.2. LTE

表4.2-1 LTE Module デバイス名

デバイス名
ttyUSB2

CONEXIOBlackBear でNetwork Managerを使用してLTE接続設定を行う場合の例を下記に記載します。 Network Managerで管理可能なLTE ModuleデバイスはttyUSB2です。

nmcli connection add con-name Ite-wwan0 type gsm ifname ttyUSB2 ¥
apn [APN] user [USER] password [PASSWORD]

※"Ite-wwan0"は、新たに接続設定を行うLTEコネクション名の例です。
 ※"[APN]"は、接続するAPNです。
 ※"[USER]"は、APNへ接続する際に使用するユーザー名です。
 ※"[PASSWORD]"は、APNへ接続する際に使用するパスワードです。

mopera.netのようにユーザー名とパスワードが不要なAPNへの接続の場合は下記のようになります。

nmcli connection add con-name Ite-wwan0 type gsm ifname ttyUSB2 apn mopera.net

ifconfigコマンドやip addrコマンドでネットワークインターフェースの状態を確認する場合には、インターフェース"ppp0"にLTE接続の状態が表示されます。

また以下のModemManagerのコマンドを使用して、挿入されたSIMやLTE通信状態を確認することができます。

mmcli -m 0

通常はNetwork ManagerやModem Managerが"/dev/ttyUSB2"を使用しています。そのため、これらの serviceを使用中にLTE Moduleに対してATコマンドを実行するなどのアクセスをしたい場合は"/dev/ttyUSB3"を 使用します。

なお、SIMを別のSIMに交換して起動した後、SIMの情報とAPN情報を設定したコネクション情報との間に不整 合が有る場合(例えば交換する前のSIMのAPN情報を設定したコネクション情報が設定されたままの時など)は、 "audit: type=1701..."というメッセージが表示されます。この場合は正しいAPN情報を新たなコネクションとして 設定し直すことにより、このメッセージは表示されなくなります。



新たにSIMを使用し始める場合や、SIMを別のSIMに交換した場合は、APN情報を新たなコネクション情報として設定した後、両者の情報の整合性を確実にとるために、一旦再起動することを推奨いたします。

表4.2-2 LTE 有効化/無効化コマンド

コマンド	機能
lte on	アプリケーションやコマンドラインからLTEを有効化(ttyUSB2を使用可能に)する
ite_on	LTE Moduleの電源ON
lto off	アプリケーションやコマンドラインからLTEを無効化(ttyUSB2を使用不能に)する
ite_oii	LTE Moduleの電源OFF

OS Version1.1.5以降では、コマンドによるLTE Module電源のOFF/ONが可能になりました。LTE Moduleの 電源をOFFにする場合は"lte_off"コマンドを、LTE Moduleの電源を再投入する場合は"lte_on"コマンドを実行し て下さい。("lte_off"コマンドの実行完了までには多少時間がかかります。"Power off LTE module"というメッセ ージが出るまでお待ちください。"lte_off"および"lte_on"は CONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)

"Ite_off"を実行するとLTE Moduleの電源が完全にOFFになり、ModemManagerも停止しますので、SMSを含めたLTE通信機能は一切使用することはできません。

CONEXIOBlackBear の起動/再起動処理中には、システム設定のためにCPUがLTE Moduleにアクセスしていますので、CONEXIOBlackBear の起動/再起動後は必ず"lte_on"の状態となります。そのため"lte_off"の状態でgo-sys-rebootを実行しても、再起動後は"lte_on"の状態となります。また"lte_off"コマンドを実行する場合は、必ず起動/再起動処理が完了してからにして下さい。

go-sys-rebootを実行した場合の再起動時にはLTE Module電源のOFF/ONが実行されますが、起動後に LTE Moduleだけをリセットしたい場合には、Ite_off → delay → Ite_onを実行して下さい。

ちなみに、Nework ManagerとModemManagerを停止したうえで、ATコマンドを使用してLTE接続設定を行う 場合には、LTE Moduleデバイスとしてwwan0を使用します。ATコマンドを使用した接続方法例を、以下に記載し ます。

- # systemctl stop ModemManager.service
- # systemctl stop NetworkManager.service
- # echo -e 'AT+CSOCKAUTH=1,2,"[PASSWORD]","[USER]"¥r¥n' > /dev/ttyUSB2
- # echo -e 'AT+CGSOCKCONT=1,"IP","[APN]"¥r¥n' > /dev/ttyUSB2
- # echo -e 'AT+CGDCONT=1,"IP","[APN]"¥r¥n' > /dev/ttyUSB2
- # echo -e 'AT\$QCRMCALL=1,1¥r¥n' > /dev/ttyUSB2

```
# udhcpc -i wwan0
```

mopera.netのようにユーザー名とパスワードが不要なAPNへの接続の場合は下記のようになります。

echo -e 'AT+CGSOCKCONT=1,"IP","mopera.net"¥r¥n' > /dev/ttyUSB2

- # echo -e 'AT+CGDCONT=1,"IP","mopera.net"¥r¥n' > /dev/ttyUSB2
- # echo -e 'AT\$QCRMCALL=1,1¥r¥n' > /dev/ttyUSB2
- # udhcpc -i wwan0

上記のような接続設定を行った場合にifconfigコマンドやip addrコマンドでネットワークインターフェースの状態 を確認する時は、"wwan0"にLTE接続の状態が表示されます。



4.3. WiFi

4.3.1. アクセスポイントへの接続

表4.3-1 WiFi デバイス名

デバイス名
wlan0

CONEXIOBlackBear のdefaultでは、WiFi機能は起動時に自動的には有効になりません。

WiFi機能は、「表4.3-2 WiFi 有効化/無効化コマンド」に記載した、WiFi有効化コマンドである"wifi_on"を実行 することによって有効になります(このコマンドは CONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)。このWiFi有効化 コマンドは、defaultの状態ではNetwork Managerを使用してWiFiコネクションを設定した後であっても、電源を 投入して起動したり再起動したりするたびごとに実行することが必要です。

起動時に自動的にWiFi機能を有効化したい場合は「4.3.4 CONEXIOBlackBear 起動時の自動的なWiFi機能有効化」に記載した方法を実行して下さい。

表4.3-2 WiFi 有効化/無効化コマンド

コマンド	機能
	アプリケーションやコマンドラインからWiFiを有効化(wlan0を使用可能に)する
wifi_on	WiFi通信モジュールの電源ON
	LTE Moduleの型番に合わせてWiFiで使用可能な周波数帯を設定・有効化する
wifi off	アプリケーションやコマンドラインからWiFiを無効化(wlan0を使用不能に)する
wiii_oli	WiFi通信モジュールの電源OFF

上記WiFi有効化コマンドを実行すると、Network Managerで管理することが可能なWiFiデバイスwlan0が使用可能になります。すでにNetwork ManagerでWiFiコネクションが設定済の場合は、上記コマンド実行後すぐに、 設定されたWiFiコネクション情報に基づいた処理が実行されます。Network Managerを使用してWiFiコネクショ ンの設定を行う場合(CONEXIOBlackBear をWiFiの子機として使用する場合)の例を下記に記載します。

nmcli connection add con-name wifi-wlan0 type wifi ifname wlan0 ssid [SSID] ¥ 802-11-wireless-security.key-mgmt [SECURITY] 802-11-wireless-security.psk [PASSPHRASE]

※"wifi-wlan0"は、新たに接続設定を行うWiFiコネクション名の例です。 ※"[SSID]"は、接続したいアクセスポイントのSSIDです。 ※"[SECURITY]"は、"wpa-psk"等のアクセスポイントへの接続に適したものを設定して下さい。 ※"[PASSPHRASE]"は、アクセスポイントへ接続するために必要となるパスフレーズです。

WiFiを無効にするためには、「表4.3-2 WiFi 有効化/無効化コマンド」に記載したWiFi無効化コマンドである "wifi_off"コマンドを実行します(WiFi有効化コマンド同様にCONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)。

WiFi無効化コマンドを実行してもNetwork Managerで設定したWiFiコネクション情報は保存されています。 WiFiコネクションがすでに設定されている場合には、WiFi有効化コマンドを実行することにより、WiFiコネクション が有効になり、WiFiコネクション情報に基づいた処理が実行されます。

使用する機能(2.4GHz/5GHz、子機/AP)を変更する場合などWiFiの設定を変更する時は、一旦WiFi無効化コマンドを実行してから設定を変更し、設定完了後にWiFi有効化コマンドを実行して下さい。



4.3.2. 2.4GHz アクセスポイント設定

「4.1.3. DHCP/DNSサーバー機能」に記載したように、CONEXIOBlackBear には標準でdnsmasqがプリインストールされており、WiFi機能でもDHCPサーバーならびにDNSサーバー機能を実行することが可能です。

CONEXIOBlackBear を2.4GHzのアクセスポイントとして使用する場合の設定例を下記に記載します。

SSID:BBtest-g

PASSPHRASE: blackbear

IP Address: CONEXIOBlackBearが102.168.31.1となり、192.168.31.1/24ネットワークのIPアドレスが 割り振られます。

WiFi Security:wpa-psk

※上記設定を行うとdnsmasqの機能によって同時に CONEXIOBlackBear がDNSサーバーになります。
※またiPv4ルーティングが有効になり、LTE<->WiFi間の通信を実現するためのIPマスカレードを含む
iptablesへの登録が行われます。

これによりLTE接続が有効な場合は、上記の設定でWiFiインターフェースに接続された機器から LTEによってInternetへ出ることができるようになります。

OS V1.0.1よりも前のOS versionを使用している場合は、アクセスポイントとして設定する前に、下記のように named.serviceを無効化しておく必要が有りますのでご注意ください。OS V1.0.1以降ではnamed.service無効 化の設定は不要です。

- # systemctl stop named.service
- # systemctl disable named.service



4.3.3. 5GHz アクセスポイント設定

CONEXIOBlackBear を5GHzのアクセスポイントとして使用する場合の設定例を下記に記載します。注意事 項等は「4.3.2. 2.4GHz アクセスポイント設定」と同様です。

nmcli con add type wifi ifname wlan0 mode ap con-name WIFI_AP_5G ssid BBtest-a
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless.band a
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless.channel 36
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless-security.key-mgmt wpa-psk
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless-security.auth-alg open
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless-security.proto rsn
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless-security.group ccmp
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless-security.pairwise ccmp
nmcli con modify WIFI_AP_5G 802-11-wireless-security.psk blackbear
nmcli con modify WIFI_AP_5G ipv4.method shared
nmcli con modify WIFI_AP_5G ipv4.addr 192.168.32.1/24

なお、「7.2.3. WiFi(無線LAN)の周波数帯(5GHz帯)」記載の使用可能周波数帯にご注意願います。使用できないchannelを指定しても有効な接続を設定することはできません。

4.3.4. CONEXIOBlackBear 起動時の自動的な WiFi 機能有効化

前述のように CONEXIOBlackBear のdefaultでは、WiFi機能は起動時に自動的には有効になりません。

WiFi機能を CONEXIOBlackBear 起動時に自動的に有効にしたい場合は、下記のコマンドを実行して下さい。 このコマンドを実行後、次の起動時からWiFi機能が自動的に有効になります。

touch /lib/firmware/brcm/auto_wifi_on

※本コマンドはOS V1.0.8以降で使用可能です。

「表4.3-2 WiFi 有効化/無効化コマンド」に記載した、WiFi有効化コマンド"wifi_on"は、LTE Moduleの型番情 報を取得した後、その情報に基づいて必要な設定を実行します。 そのため CONEXIOBlackBear 起動時に自 動的に

WiFi機能を有効にしたいという場合、rc.localへの"wifi_on"の追記では正常に動作しませんので注意して下さい。

※OS V1.0.3以前の場合は、"wifi_on"コマンドは、LTE Moduleの型番情報を取得するなどの処理がまだ有 効になっていないため、rc.localへの"wifi_on"の追記でも動作させることができます。

起動時に自動的に有効化されたWiFi機能を一時的に無効化したい場合は、前述の"wifi_off"コマンドを実行して下さい。再度WiFi機能を有効化する場合は、前述の"wifi_on"を実行することよってWiFi機能を有効化することができます。

起動時に自動的にWiFi機能を有効化しない設定に戻したい場合は、下記のコマンドを実行して下さい。このコマンドを実行後、次の起動時からWiFi機能が自動的には有効にならなくなります。

rm /lib/firmware/brcm/auto_wifi_on

※本コマンドはOS V1.0.8以降で使用可能です。

これで CONEXIOBlackBear のdefault状態(WiFi機能は起動時に自動的には有効にならない)に戻ります。



4.4. Bluetooth

表4.4-1 Bluetooth デバイス名



CONEXIOBlackBear にはBlueZが実装されており、hcitoolやhciconfigなどが使用可能です。これらのツールで使用可能なBluetoothデバイスはhci0です。

Bluetoothを有効にするためには、「表4.4-2 Bluetooth 有効化/無効化コマンド」に記載したBluetooth有効化 コマンドである"bt_on"コマンドを実行します(CONEXIOBlackBear 固有のコマンドです)。このコマンドは電源を 投入して起動したり再起動したりするたびごとに実行することが必要です。

このコマンドを実行することにより、hciconfig等で管理することが可能なBluetoothデバイスhci0が有効になります。

コマンド	機能
bt_on	アプリケーションやコマンドラインからBluetoothを有効化する (hci0を使用可能かつ"hciconfig up"の状態にする) Bluetoothモジュールの電源ON
bt_off	アプリケーションやコマンドラインからBluetoothを無効化する (hci0を"hciconfig down"の状態にする) BluetoothモジュールをSuspend状態にする

表4.4-2 Bluetooth 有効化/無効化コマンド

また以下のようなコマンドで CONEXIOBlackBear のBluetoothデバイス情報を確認したり、周辺のBluetooth デバイスをスキャンしたりすることができます。

hciconfig -a

hcitool scan

コマンドラインからBluetooth接続を行う場合には、bluetoothctlを実行して対話的に接続を行うこともできます。 ここではbluetoothcltを利用した接続例の概略のみを記載します。(接続するデバイスによって詳細は異なる場合 が有ります)

#	bluetoothctl		コマンドラインでbluetoothcltを実行
	[bluetooth]#	power on	(プロンプトが変わる) コントローラを起動
	[bluetooth]#	scan on	周辺をスキャンして接続したいデバイスを探す
	[bluetooth]#	devices	ペアリングしたいデバイスのBDaddressを確認する
	[bluetooth]#	pair [BDaddress]	ペアリングする
	[bluetooth]#	trust [BDaddress]	信用登録する
	[bluetooth]#	connect [BDaddress]	接続する
	•••		
	[bluetooth]#	help	Helpを見る
	•••	-	
	[bluetooth]#	exit	bluetoothcltを終了して対話モードから抜ける
#			



Bluetoothを無効な状態(コネクションがdownした状態)にするためには、「表4.4-2 Bluetooth 有効化/無効化コ マンド」に記載したBluetooth無効化コマンドである"bt_off"コマンドを実行します("bt_on"コマンド同様にCONEXI OBlackBear 固有のコマンドです)。

再度Bluetoothを有効にする場合は、上記のように"bt_on"コマンドを実行します。

4.5. Serial

表4.5-1 Serial通信 デバイスファイル



CONEXIOBlackBear のSerial通信に使用するデバイスファイルは"/dev/ttymxc2"です。Serialインターフェースは、RS-232C、RS-485 Half Duplex、RS-485/RS-422 Full Duplexに対応しており、これらを「図4.5-1 Serialインターフェース切り替えスイッチ」に記載した"SD-Door"の内側に有る3P DIPスイッチで切り替えて使用します。3P DIPスイッチの切り替えは電源OFFの状態で行って下さい。



図4.5-1 Serialインターフェース切り替えスイッチ

Serialインターフェース切り替えスイッチの設定を 表4.5-2 および 表4.5-3 に記載します。 図4.5-1 のSW1とSW2をRS-232C、RS-485 Half Duplex、RS-485/RS-422 Full Duplexの切り替えに使 用し、SW3はRS-485/RS-422を使用する場合の終端抵抗の設定に使用します。



SW1	SW2	Serial I/F Mode
OFF	OFF	LOOPBACK
ON	OFF	RS-232C

ON

ON

表4.5-2 Serialインターフェース切り替え設定

表4.5-3 終端抵抗設定

RS-485 Half Duplex

RS-485/RS-422 Full Duplex

SW3	終端抵抗
OFF	OPEN
ON	120 Ω

CONEXIOBlackBear には、Serial通信の動作状況を試験するツールであるuarttestが実装されています。下記のコマンド例のようにして、uarttest搭載機器同士の対向またはloopbackでSerial通信の接続を確認することができます。

uarttest -s -e -p /dev/ttymxc2 -b 115200 -q -c -a 2000

ちなみにRS-485をプログラムから使用する場合には、プログラム中に以下の設定が必要になります。

/*In userspace, please make sure the configurtion of RS-485 as below:*/

/* enable RS485 mode: */ rs485conf.flags |= SER_RS485_ENABLED;

OFF

ON

/* set logical level for RTS pin equal to 1 when sending: */ rs485conf.flags |= SER_RS485_RTS_ON_SEND;

/* set logical level for RTS pin equal to 0 after sending: */ rs485conf.flags &= ~(SER_RS485_RTS_AFTER_SEND);

4.6. CAN

表4.6-1 CAN デバイス名

デバイス名
can0
can1

CONEXIOBlackBear はCAN Version 2.0B activeに対応しているcan0とcan1という2系統のCANポートを 標準搭載しています。これらのCANポートを有効にするためには、有効にするCANポートごとに以下のコマンドを 実行します。

例) can0ポートを有効にする場合

ip link set can0 up type can bitrate 250000

ifconfig can0 up

CONEXIOBlackBear にはCAN-Utilsが実装されており、送信は"cansend"コマンド、受信は"candump"コマンドで実行することが可能です。



例) can0ポートヘデータ出力をする場合 # cansend can0 -i 0x801 0x01 0x22 0x23 0x34 0x45 0x56 0x78 0x89 -e --loop=10

例) can1ポートからデータを入力する場合# candump can1

なお、CAN-BUSの途中でも末端でも CONEXIOBlackBear を使用可能とするために、CANポートには終端 抵抗を設置しておりませんのでご注意ください。(終端抵抗の切り替え機能はございません)

4.7. DI/DO

CONEXIOBlackBear のDI/DOは「表4.7-1 DI/DO制御用ポート」に記載した制御用gpioポートを使用して制御します。DIポートはデジタル入力用の4つのポート、DOポートはデジタル出力用の4つのポート、PWR_CTLポートはDIまたはDOポートのpull upを制御するポートです。

制御用ポート	機能
/sys/class/gpio/gpio9	DI1
/sys/class/gpio/gpio205	DI2
/sys/class/gpio/gpio101	DI3
/sys/class/gpio/gpio171	DI4
/sys/class/gpio/gpio167	DO1
/sys/class/gpio/gpio170	DO2
/sys/class/gpio/gpio32	DO3
/sys/class/gpio/gpio33	DO4
/sys/class/gpio/gpio2	PWR_CTL_DI
/sys/class/gpio/gpio5	PWR_CTL_DO

表4.7-1 DI/DO制御用ポート

上記のポートは起動時には有効になっておりません。使用する場合には上記全ての制御用gpioポートNo.を、 下記のように/sys/class/gpio/exportに対して書き込んで、ポートを有効にする必要が有ります。

例) DI1を制御するgpioポートを有効にする場合# echo 9 > /sys/class/gpio/export

次にDIポート、DOポート、PWR_CTLポートとして使用する設定を行います。設定は各制御用gpioポートの directionに対して「表4.7-2 各ポートの機能設定」に記載した値を書き込みます。 (DIポートは"in"を、DOポートは"out"を、PWR_CTLポートは"out"を書き込みます)

表4.7-2 各ポートの機能設定

制御用ポート	direction 設定値
/sys/class/gpio/gpio9	in
/sys/class/gpio/gpio205	in
/sys/class/gpio/gpio101	in
/sys/class/gpio/gpio171	in
/sys/class/gpio/gpio167	out
/sys/class/gpio/gpio170	out
/sys/class/gpio/gpio32	out
/sys/class/gpio/gpio33	out
/sys/class/gpio/gpio2	out
/sys/class/gpio/gpio5	out



例) DI2を制御するポートをDIポートとして設定する場合 # echo "in" > /sys/class/gpio/gpio205/direction

さらにPWR_CTL_DIポートおよびPWR_CTL_DOポートに対して、DIポートおよびDOポートを"無電圧接点" にするか、CONEXIOBlackBear への入力電圧へ"pull up"するかの設定を行います。設定はそれぞれのポートのvalueに対して「表4.7-3 PWR_CTLポートの設定値」に記載した設定値を書き込みます。

表4.7-3 PWR_CTLポートの設定値

制御田ポート	value 設定値		
ין אוינדליקאןנימי	0	1	
/sys/class/gpio/gpio2	DI 無電圧接点	DI pull up	
/sys/class/gpio/gpio5	DO 無電圧接点	DO pull up	

- 例) DIポートを CONEXIOBlackBear への入力電圧へpull upする場合 # echo 1 > /sys/class/gpio/gpio2/value
 - (注):上記の"無電圧接点"または"pull up"の設定は、DI1~DI4全体への設定になります。ポートごとに 個別に設定することはできません。gpio5に対する設定も同様に、DO1~DO4全体への設定に なります。

上記のような設定を行った後、各DOポートの制御用gpioポートのvalueに対して"0"を書き込んだ場合は"Hi"レベル(DO pull up 時)または"Hiインピーダンス"(無電圧接点時)の出力が、"1"を書き込んだ場合は"Lo"レベルの 出力がDOポートで実行されます。

- 例) DO3ポートに対して"Lo"レベルの出力を実行する場合
 - # echo 1 > /sys/class/gpio/gpio32/value → DO3ポートの出力:"Lo"レベル

また各DIポートの制御用gpioポートのvalueから値を読み出すことによって、DIポートへの入力状態"Hi"レベル (無電圧接点時)または"Hiインピーダンス"(DI pull up 時)の場合は"0"、"Lo"レベルの場合は"1")を取得すること ができます。

例) DI4ポートへの入力状態を取得する場合 # cat /sys/class/gpio/gpio171/value

→ Dl4ポートの入力状態: "Hi"レベル/"Hiインピーダンス"

なお制御用gpioポートの状態は、以下のコマンドで確認することができます。このコマンドで確認することができる各制御用gpioポートのレベル表記はvalueが"0"の場合は"lo"、"1"の場合は"hi"と表示されます。DI/DOポートの入出力レベルとは逆の表記になりますので注意して下さい。

cat /sys/kernel/debug/gpio

0



4.8. GNSS

表4.8-1 GNSS Module デバイスファイル

デバイスファイル	
/dev/ttymxc4	

CONEXIOBlackBear はGNSS Moduleとしてu-bloxのNEO-M8Nを標準搭載しています。GNSS Moduleで 取得された位置情報は、シリアル通信出力として"/dev/ttymxc4"というデバイスファイルに1秒間隔で出力されて います。

例) GNSS Moduleからの位置情報を取得する方法その1

In /dev/ttymxc4 /dev/gpsdevice

stty -F /dev/gpsdevice ispeed 9600 && cat < /dev/gpsdevice

GNSS Moduleから位置情報が出力されているかどうかを簡単に確かめるだけならば、以下のような方法でも 確認することができます。

例) GNSS Moduleからの位置情報を取得する方法その2 # cat /dev/ttymxc4

CONEXIOBlackBear ではNEO-M8Nをデフォルト設定で使用しています。このデフォルト設定で位置情報取 得のために使用しているGNSS衛星は「GPS+GLONASS+SBAS+QZSS」です。

これらの衛星と同時にGalileoを追加して使用することができますが、使用するためには下記のコマンド例のように、NEO-M8Nに対してGalileoを追加使用するための設定を行う必要が有ります。

例) Galileoを追加して「GNSS+GLONASS+Galileo+SBAS+QZSS」を使用するためのコマンド例

echo -e "¥xB5¥x62¥x06¥x3E¥x3C¥x00¥x00¥x00¥x20¥x07¥x00¥x08¥x10¥x00¥x01¥x00¥x01¥x0 1¥x01¥x01¥x03¥x00¥x01¥x00¥x01¥x02¥x04¥x08¥x00¥x01¥x00¥x01¥x03¥x08¥x10¥x00¥x 00¥x00¥x01¥x01¥x04¥x00¥x08¥x00¥x00¥x01¥x01¥x05¥x00¥x03¥x00¥x01¥x00¥x01¥x01¥x06 ¥x08¥x0E¥x00¥x01¥x00¥x01¥x01¥x30¥xAD" > /dev/ttymxc4

GNSS Moduleから出力される位置情報は、NMEAフォーマットのメッセージです。GNSS Moduleのデフォルト設定で出力されるメッセージの種類を「表4.8-2 NMEAメッセージ」に記載します。

出力メッセージ	主な情報
GNRMC	位置、測位日時、速度、方位
GNVTG	速度、方位
GNGGA	位置、測位時刻、衛星捕捉数、精度
GNGSA	測位使用衛星、精度低下率
GPGSV	衛星情報 (GPS、QZSS)
GLGSV	衛星情報 (GLONASS)

表4.8-2 NMEAメッセージ

位置情報の取得に使用する衛星として、準天頂衛星みちびき(QZSS)に対応していますが、対応機能は"L1C/ A:衛星測位サービス"です。"L1S:サブメータ級測位補強サービス"および"L6:センチメータ級測位補強サービス" には対応しておりません。



4.9. USB

表4.9-1 USB制御用ポートと設定値

制御用ポート	direction 設定値	
/sys/class/gpio/gpio174	out	

表4.9-2 USB Memory デバイスファイル

デバイスファイル
/dev/sda1

CONEXIOBlackBear のUSBポートは起動時には有効になっておりません。USBポートにUSB Memoryや その他のUSB機器を接続して使用するためには、以下のコマンドを実行します。

echo 174 > /sys/class/gpio/export

echo out > /sys/class/gpio/gpio174/direction

これにより、USBポートにUSB Memoryを接続した場合は、「表4.9-2 USB Memory デバイスファイル」に記載したように、"/dev/sda1"というデバイスファイルとして認識されるようになります。このデバイスファイルをいずれかのディレクトリにmountすることによって、USB Memoryに対する読み書きが可能となります。

なお"/dev/sda1"の"1"は一つ目のパーティションであることを示しています。複数のパーティションがmicroSD Card上に存在している場合は、それぞれのパーティションが"/dev/sda2"、"/dev/sda3"のようなデバイスファイル として認識されます。

その他のUSB機器を接続した場合は、認識されるデバイスファイルが接続したUSB機器によって異なりますのでご注意願います。

4.10. SD (Storage)

表4.10-1 microSD Card デバイスファイル

デバイスファイル
/dev/mmcblk3p1

CONEXIOBlackBear のmicroSDスロットは"UHS-I SDR104"のmicroSDXCに対応しており、exFATへも対応しています。 (exFATへの対応はFUSEを利用した実装のため、udevを利用してexFATのファイルシステムを mountすることは推奨しておりません。 Transport endpoint not connected エラーが発生します)

microSDスロットに挿入されたmicroSD Cardは、"/dev/mmcblk3p1"というデバイスファイルとして認識されます。このデバイスファイルをいずれかのディレクトリにmountすることによって、microSD Cardに対する読み書きが可能となります。

なお"/dev/mmcblk3p1"の"p1"は一つ目のパーティションであることを示しています。複数のパーティションが microSD Card上に存在している場合は、それぞれのパーティションが"/dev/mmcblk3p2"、 "/dev/mmcblk3p3" のようなデバイスファイルとして認識されます。

4.11. LED

4.11.1. USER LED

CONEXIOBlackBear には「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示すようにトップカバー上面に2色の "USER LED"が設けられています。

この2色LEDを制御するための"File System Node"を「表4.11-1 USER LED」に記載します。

表4.11-1 USER LED

USER LED	Color	File System Node
user1-led	赤	/sys/class/leds/user1-led
user2-led	緑	/sys/class/leds/user2-led

これらのUSER LEDは 表4.11-1 に記載したそれぞれの"File System Node"下のファイルに値を設定する ことによって制御することができます。USER LED共通の制御方法を「表4.11-2 USER LED 制御方法」に記載 します。

制御用ファイル	設定値	制御結果
brightnass	0	LED OFF
brightness	1	LED ON
	none	LED OFF ※triggerの点灯パターンを停止してLEDをOFFにします。
trigger	timer	Default Value delay_on: 500ms delay_off: 500ms ※delay_on、delay_offの値は"trigger"に"timer"をセットした後で なければ設定できません。 ※delay_on、delay_offの値は"trigger"に何か値を設定すると Default Valueに戻ります。
	heartbeat	Default Value invert : 0 ※心臓の鼓動のような点滅を実行します。 ※invertに1を設定すると点滅のパターンが逆転します。 ※invertの値は"trigger"に何か値を設定するとDefault Valueに 戻ります。
	oneshot	Default Value delay_on: 100ms delay_off: 100ms invert: 0 ※shotlこ何か任意の値を設定すると上記の設定で1回だけ点灯 または消灯します。 ※delay_on、delay_off、invert、shotの値は"trigger"に"oneshot"を セットした後でなければ設定できません。 ※invertに1を設定すると点灯のパターンが逆転します。 ※delay_on、delay_off、invertの値は"trigger"に何か値を設定 するとDefault Valueに戻ります。

表4.11-2 USER LED 制御方法



4.11.2. WiFi/Bluetooth LED

CONEXIOBlackBear には「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示すようにトップカバー上面に2色の "WiFi/Bluetooth LED"が設けられています。

この2色LEDの色を「表4.11-3 WiFi/Bluetooth LED」に記載します。

表4.11-3 WiFi/Bluetooth LED

USER LED	Color	
Bluetooth	赤	
WiFi	禄	

これらのLEDは、それぞれの通信路の接続・通信状態によって点灯/消灯/点滅します。これらのLEDに共通の 通信路の状態と点灯/消灯/点滅との関係を「表4.11-4 WiFi/Bluetooth LEDの点灯条件」に記載します。

表4.11-4 WiFi/Bluetooth LEDの点灯条件

LED	通信路の状態
消灯	未接続 ※通信モジュールに電源が入っていても、相手/ネットワークに対して接続されていない 場合は点灯しません。
点灯	接続中 ※相手/ネットワークに対して接続中(connected)で、通信路にパケットが流れていない 状態の時に点灯します。
点滅	通信中 ※相手との間で通信を実行中で、通信路にパケットが流れている状態の時に点滅 します。

4.11.3. LTE 電波強度 LED

CONEXIOBlackBear には「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に示すようにトップカバー上面に緑色の "LTE電波強度LED"が3個設けられています。

これらのLEDはLTEネットワーク接続中に、LTEモジュールのSIM7600から約5秒間隔で読み出した"rssi"値に応じて点灯/消灯します。"rssi"値とLTE電波強度LEDの点灯/消灯との関係を「表4.11-5 LTE電波強度LEDの点灯条件」に記載します。点灯状態に即時性や正確性はありませんので、あくまでも目安としてお考え下さい。

表4.11-5 LTE電波強度LEDの点灯条件

rss1-led 🍸	rss2-led 🍸	rss3-led 🍸	rssi值
			-107 dBm 以下
			-105 dBm ~ -87 dBm
			-85 dBm ~ -67 dBm
		-	-65 dBm 以上
:消灯	:点灯		



4.12. USER Switch

表4.12-1 USER Switch インプットデバイスファイル

インプットデバイスファイル	
/dev/input/event0	

CONEXIOBlackBear はユーザーが使い方を設定できるUSER Switchを1個搭載しています。USER Switchの"押す/離す"は、USER Switchのインプットデバイスファイル"/dev/input/event0"に発生するイベントで 検出します。

発生するイベントは下記のように"/usr/include/linux/input.h"に定義されています。

};

- 例) User Switchを押した時に発生するイベント time XXXXXXXXXXXXXXXXXXX, type 1 (EV_KEY), code 256 (BTN_0), value 1 time XXXXXXXXXXXXXXXX, ------- SYN_REPORT -------

上記のイベントは下記のコマンドで確認することができます。

hexdump /dev/input/event0

また CONEXIOBlackBear には"evtest"が実装されているので、このコマンドを実行することによっても確認 することができます。(上記の発生イベント例はevtestコマンド実行結果の一部です)

evtest /dev/input/event0

4.13. CPU 温度

「図2.4-1 インターフェースレイアウト図」に記載した外部インターフェースではありませんが、CONEXIOBlack Bear は搭載しているCPUの温度を測定することができますので、参考として記載しておきます。

CPU温度情報を取得するためには以下のコマンドを実行します。コマンドの次の行は実行結果の例です。

cat /sys/class/thermal/thermal_zone0/temp
39315

上記実行結果例の"39315"は、"39.315℃"を表しています。



4.14. SMS

「3.5.2. Resume」にも記載したように、SMS送受信を行うためには、SMS通信が可能な通信契約が必要ですのでご注意ください。そして「4.2. LTE」に記載したLTE接続設定が完了してLTEがすでに接続されている場合は、SMSの受信は自動的に実行されます。

以下にModem Managerを使用したSMS操作方法の主なものを記載します。

[SMSのリスト表示] # mmcli -m 0 --messaging-list-sms Found 3 SMS messages: /org/freedesktop/ModemManager1/SMS/0 (received) 応答例 /org/freedesktop/ModemManager1/SMS/1 (received) /org/freedesktop/ModemManager1/SMS/2 (sent) [SMSの内容表示] # mmcli -s [SMS Number] ※"[SMS Number]"は、内容を表示したいSMSの番号です。(上記リスト表示例の0~2) ※"Content"として送信元電話番号およびSMSの内容(本文テキスト)が、"Properties"として関連情報が 表示されます。 [SMSの作成] # mmcli -m 0 --messaging-create-sms="number=[Phone Number],text='[SMS Message]" Successfully created new SMS: 応答例 /org/freedesktop/ModemManager1/SMS/[SMS Number] (unknown) ※"[Phone Number]"は、送信先の電話番号です。 ※"[SMS Message]"は、送信するSMSの内容(本文テキスト)です。 ※SMS作成に成功した時には上記のメッセージが表示されます。 "[SMS Number]"は作成したSMSの番号です。この番号はSMSの送信時に使用します。 [SMSの送信] # mmcli -s [SMS Number] --send ※"[SMS Number]"は送信するSMSの番号です。この番号はSMS作成時に表示されたものを使用します。 [SMSの削除]

mmcli -m 0 --messaging-delete-sms [SMS Number]

※"[SMS Number]"は削除するSMSの番号です。



5. OS 更新 (初期化)

本書ではmicroSD Cardを使用して CONEXIOBlackBear のOS全体を入れ替える(初期化する)方法のみに ついて記載します。他のソフトウェアやファームウェアの更新方法については別紙「簡易プログラミングマニュアル」 を参照して下さい。

5.1. OS の Version 確認方法

CONEXIOBlackBear に搭載されているOSのversion情報は"/etc/os-release"に保存されています。保存されているversion情報の例を下記に記載します。

cat /etc/os-release ID="fsl-imx-fb" NAME="MSI MS5776 Release Distro" VERSION="4.9.88-2.0.0-1.1.5 (rocko)" VERSION_ID="4.9.88-2.0.0-1.1.5" PRETTY_NAME="MSI MS5776 Release Distro 4.9.88-2.0.0-1.1.5 (rocko)"

上記のversion情報例では"VERSION"行などの末尾の"1.1.5"が、リリースごとに更新されるversion No.です。 異なるリリースversionのOSへと変更する場合などは、この箇所を確認して下さい。 "VERSION"行の詳細内容は下記の通りです。(上記version情報例を用いて記載します)

"4.9.88" : Linux Kernel Version
"4.9.88-2.0.0" : NXP BSP(Board Support Package) Version
"1.1.5" : CONEXIOBlackBear Firmware Release Version
"(rocko)" : Yocto Version – rocko (2.4.2)

また「5.2. microSD Cardを使用したOS更新」に記載したOS更新を実行すると、同時に電源管理プロセッサで あるMCUのファームウェアも(更新内容が有る場合には)更新されます。MCU ファームウェアは、この方法での み更新可能です。MCU ファームウェアの更新が行われた場合は、その旨ユーザーサポートサイトに掲載します。 MCU ファームウェアのversion情報は"/proc/ms5776_mcu_ver/mcu_version"に保存されています。保存さ れているversion情報の例を下記に記載します。

cat /proc/ms5776_mcu_ver/mcu_version
ms5776_MCU_AP_Ver=V0.20

上記のversion情報例では、"V0.20"の部分がMCUのversion No.です。

OSおよびMCUのversion情報は、OS更新後に再起動を行った後で確認して下さい。

5.2. microSD Card を使用した OS 更新

本章ではmicroSD Cardを使用してOSを更新する手順を記載します。

5.2.1. "SD_burn_EMMC"のダウンロード

下記URLのサーバーから、更新を行うversionの"SD_burn_EMMC-VXXX.zip" ファイルをダウンロードします。 (XXXはリリースごとに更新されるversion No.です → 例:OS V1.1.5の場合はSD_burn_EMMC-V115.zip)

Server URL: <u>https://bb.conexio-iot.jp/support</u> (※CONEXIOBlackBear ユーザーサポートサイトです)

ダウンロードした"SD_burn_EMMC"ファイルは解凍して、Windows PCの仮想マシン上やLinux PC上の Ubuntuに保存して下さい。(Install Media作成操作はUbuntu 18.04上での操作を想定しています)



5.2.2. Install Media (microSD Card) 作成手順

Install Mediaとして使用するmicroSD CardをPCに挿入します。microSD Cardの容量は4GBのものでは 作成することができませんので、8GB以上のものを使用して下さい。

挿入後"lsblk"コマンド等でmicroSD Cardのdevice名を確認しておきます。ここでは例として"/dev/sdX"と記載しておきます。microSD Cardを挿入した時にmountされている場合は、superuser権限でumountしておきます。

Ubuntu上に保存した"SD_burn_EMMC"ディレクトリに移動します。

cd SD_burn_EMMC

"SD_burn_EMMC"ディレクトリ中に有るシェルスクリプト"mkSD.sh"をsuperuser権限で実行します。

sudo ./mkSD.sh /dev/sdX

"mkSD.sh"の実行が完了したら、一旦microSD CardをPCから取り出した後、再度PCへ挿入します。

挿入後再度"lsblk"コマンド等でmicroSD Cardのdevice名を確認しておきます。ここでも例として"/dev/sdX"と記載しておきます。この時もmicroSD Cardがmountされている場合は、superuser権限でumountしておきます。

"SD_burn_EMMC"ディレクトリ中に有るシェルスクリプト"updateSD.sh"をsuperuser権限で実行します。

sudo ./updateSD.sh /dev/sdX

※途中で"Proceed anyway? (y,N)"が表示された場合は、"y"を入力します。

"updateSD.sh"の実行が完了したらInstall Mediaの作成は完了です。microSD CardをPCから取り出して下さい。

5.2.3. CONEXIOBlackBear 本体での OS 更新手順

作成したInstall MediaであるmicroSD Cardを CONEXIOBlackBear のmicroSDスロットへ挿入します。

microSD Card挿入後、USER SWを押しながら CONEXIOBlackBear の電源を投入します。これにより microSD Cardからの起動が開始されます。

電源投入後、全てのLEDが点灯した後、電源LED以外の全てのLEDが消灯して、電源LEDが点滅を開始した らUSER SWから指を離します。

microSD Cardからの起動が完了してOS更新のためのeMMC書き換えが始まると全てのLEDが点灯します。 そのまましばらくOSの更新が完了するのを待ちます。

OSの更新が完了すると、電源LEDが点灯したままで電源LED以外の全てのLEDが点滅を開始します。この状態になったら電源をOFFにすることができます。OS V1.0.0以降の本手順による更新には、約11分程度かかります。OSの更新が完了する前に誤って電源をOFFにすることが無いよう注意して下さい。

OSの更新完了時にCONEXIOBlackBear のLinux コンソールには、"microSD Cardを抜いてOSを再起動してください"という旨のメッセージが表示されます。

再起動後には必要に応じて「5.1. OSのVersion確認方法」に記載した方法でOSのversion情報を確認して下さい。





図5.2-1 OS更新時のLED表示

6. 開発用ツール

6.1. Debug Cable

CONEXIOBlackBear の初期設定を行なったり、CONEXIOBlackBear 上でソフトウェア開発やソフトウェア の動作確認を行なったりする場合のために、"Debug Cable"を提供しています。

この"Debug Cable"は、標準的なセットには添付されておりませんので、必要な場合は別途ご購入先へお問い合わせ願います。

"Debug Cable"は 図6.1-1 Debug Cable A および 図6.1-2 Debug Cable B に記載した2本のケーブル で構成されています。2本のケーブルは 図6.1-1 Debug Cable A 右端のコネクタと 図6.1-2 Debug Cable B 左端のコネクタを接続して使用します。 "Debug Cable"を用いてPCにCONEXIOBlackBear を接続すると、 PCから CONEXIOBlackBear のLinux コンソールを利用できるようになります。



図6.1-1 Debug Cable A



図6.1-2 Debug Cable B



6.2. Debug Port

CONEXIOBlackBear 本体への接続は、「図6.2-1 本体へのDebug Cable接続」に記載したようにSD-Door を開いて、microSDスロットとmicroSIMスロットとの間に有る"Debug Port"に対して、図6.1-1 Debug Cable A 左端の3Pコネクタを接続します。



図6.2-1 本体へのDebug Cable接続

PCへの接続は、図6.1-2 Debug Cable B 右端のRS232Cコネクタ(D-sub 9pin メス端子)をPCのシリアル ポートに接続するか、市販の"USB – Serial 変換ケーブル"を使用してPCのUSBポートに接続します。

上記のような接続を行うことにより、PC上のTera Termのようなターミナルエミュレータを使用してLinuxのコン ソール画面から CONEXIOBlackBear を操作することができます。

ターミナルエミュレータのシリアル通信設定を「表6.2-1 ターミナルエミュレータのシリアル通信設定」に記載します。

設定項目	設定値
通信速度	115,200 bps
データ長	8 bits
パリティ・ビット	none
ストップ・ビット	1 bit
フロー制御	none

表6.2-1 ターミナルエミュレータのシリアル通信設定

ネットワーク設定が完了し、CONEXIOBlackBear のIP Addressがわかっている場合は、ネットワーク経由で sshを使用してLoginすることも可能です。



7. 注意事項

7.1. 安全に使用するための取扱注意事項

マニュアル、関連資料をご確認いただき、使用上の注意を守って正しくご使用ください。

以下の区分は、誤った使用をした場合に生じる危害や損傷の程度を説明しています。

<u> </u> 危険	取り扱いを誤った場合、「死亡又は重傷を負う危険が切迫して想定される」内容です。
▲ 警告	取り扱いを誤った場合、「死亡又は重傷を負う危険が想定される」内容です。
⚠ 注意	取り扱いを誤った場合、「傷害や物的損害を負う危険が想定される」内容です。



- CONEXIOBlackBearを高温になる場所、熱のこもりやすい場所、直射日光の当たる場所などで使用、保管、 放置しないでください。火災、故障、感電等の原因となります。
- CONEXIOBlackBearの防塵・防水性能はIP40です。屋内、自動車内等で、ほこりが少なく、雨水等がかからない環境でご使用ください。屋外で使用される場合は防塵・防水性を十分に確保した上でご使用ください。水、ほこり、湿気、油等の多い場所での使用は火災、故障、感電等の原因となります。
- 高い信頼性、安全性(医療機器、航空機器等)を要求される使用を意図しておりません。これらの用途で使用 された際に生じた、いかなる損害に対しても弊社は責任を負いかねます。
- 一般電子機器用に製造された材料を使用しています。外来ノイズやサージ等の影響で誤作動や故障が発生 する可能性があります。万一の誤作動や故障に備えて、生命・人体・財産が侵害されることのないように装置 としての安全設計を行い、十分な措置を講じた上でご使用ください。



- 落下等の強い衝撃をかけないでください。衝撃により破損した状態で使用した場合、火災、故障、感電等の原因になる場合があります。
- CONEXIOBlackBearには無線機能が搭載されており医療機器等の周辺機器へ影響を及ぼす可能性があり ます。そのような機器からは十分に離れた場所に取付けてご使用ください。
- CONEXIOBlackBearを改造することは、火災、故障、感電等の原因になる場合があります。
- CONEXIOBlackBearにはコイン型二酸化マンガンリチウム電池が組み込まれています。電池の+極と一極を ショートさせると、液漏、発熱、破裂、発火の恐れがあります。

<u> 注</u>意

- CONEXIOBlackBearは取付けた状態での使用を想定しています。取付けていない状態や手に持っての使用 はお止めください。
- CONEXIOBlackBearを連続して使用した場合、放熱のため本製品の筐体が高温になることがあります。
- CONEXIOBlackBearのOSはLinuxを使用しています。個別に明示されている場合を除き、オープンソースとしてソースコードが提供されています。再配布等の権利については、各ソースコードに記載されたライセンス形態にしたがって、お客様の責任において行使してください。
- プリインストールソフトウェア以外のソフトウェアに関しては、追加される方の責任のもと、使用用途、信頼性等を十分に検証の上、追加してください。追加ソフトウェアに起因する不具合は、いかなる損害に対しても弊社は責任を負いかねます。
- アンテナ、各種ケーブル、microSIMの抜き挿しは電源が入った状態で行わないでください。故障、破損の原因 となります。
- 外部インターフェース(アンテナ端子、コネクタ、スロット、スイッチ等)に無理な力を加えないでください。故障、 破損の原因となります。
- 溶剤を含む化学薬品や洗浄剤を使用して清掃を行わないでください。

その他の注意

● CONEXIOBlackBearに貼りつけられた銘板、ラベル、シール等を剥がしたり、傷つけたりしないでく ださい。製品保証の対象外になる場合があります。

7.2. 電波に関する注意事項

CONEXIOBlackBearが使用している周波数帯では、電子レンジ等の産業・科学・医療用機器のほか工場の製造ライン等で使用されている移動体識別用の構内無線局及び特定小電力無線局並びアマチュア無線局が運用されています。

- CONEXIOBlackBearを使用する前に、近くで移動体識別用の構内無線局及び特定小電力無線局並びに アマチュア無線局が運用されていないことを確認してください。
- 万一、CONEXIOBlackBearから移動体識別用の構内無線局に対して有害な電波干渉の事例が発生した 場合には、速やかに使用を中止してください。
- その他、CONEXIOBlackBearから移動体識別用の特定小電力無線局あるいはアマチュア無線局に対す る障害となる電波干渉の事例が発生した場合には、速やかに使用を中止してください。



7.2.1. Bluetooth の周波数帯

Bluetooth機能が使用する周波数帯は以下の通りです。

2.4 I	FH 4	

2.4 : 2400MHz帯を利用する無線設備であることを示します。

FH : 変調方式がFH-SSであることを示します。

4 : 想定される与干渉距離が40m以下であることを示します。 2400MHz~2483.5MHzの帯域を利用し、かつ移動体識別装置の帯域を 回避不可であることを示します。

7.2.2. WiFi(無線 LAN)の周波数帯(2.4GHz 帯)

WiFi(無線LAN)機能が使用する周波数帯は以下の通りです。

2.4	DS/0	F 4

- 2.4 : 2400MHz帯を利用する無線設備であることを示します。
- FH : 変調方式がDS-SS、変調方式がOFDMであることを示します。

4 : 想定される与干渉距離が40m以下であることを示します。

2400MHz~2483.5MHzの帯域を利用し、かつ移動体識別装置の帯域を 回避可能であることを示します。

7.2.3. WiFi(無線 LAN)の周波数帯(5GHz 帯)

"SIM7600JC-H"を搭載した国内向けモデルの場合、5GHz帯で使用可能なCHは以下の通りです。

5.2GHz帯(W52:36、40、44、48ch)

5.3GHz帯(W53:52、56、60、64ch)

5.6GHz帯(W56:100、104、108、112、116、120、124、128、132、136、140ch)

※5GHz帯の屋外での使用は電波法の定めにより制限されています。詳しくは、総務省のWEBサイトをご確認 下さい。

※WiFiの5GHz アクセスポイント設定を使用する場合、CONEXIOBlackBearで使用可能な周波数帯は、

5.2GHz帯(W52:36、40、44、48ch)のみに設定されていますのでご注意願います。

※使用する周波数帯を変更する場合は、必ず日本国の関連法規を遵守してお客様ご自身の責任において変 更して下さい。誤った設定を行った場合、法律により罰せられることが有ります。



7.3. 電波法 および 電気通信事業法対応

CONEXIOBlackBear は、LTE Moduleとして国内向けモデルでは"SIM7600JC-H"を搭載しています。また WiFi/Bluetooth Moduleとして"WM-BAC-BM25"を搭載しています。これらの通信Moduleは、日本国内での使 用のために必要となる"電波法に基づく技術基準適合証明"および、"電気通信事業法に基づく技術基準適合認 定"を受けています。

これらの通信Moduleの認証番号を「表7.3-1 技術基準適合証明/認定情報」に記載します。

表7.3-1 技術基準適合証明/認定情報

技適項目	Module	認証番号
電池はに其べくは彼其進済会訂明 (工事記社詞訂)	BM25	020-180109
电波法に基 八枚帆基华週首 証明 (上争政計総証)	SIM7600	003-180005
電気通信車業はに甘べ/比化甘淮海ム河ウ (汎社河江)	BM25	D180048020
电式通信争未法に基 八投州基华迥古能足(改訂能証)	SIM7600	DF180082003

「表7.3-1 技術基準適合証明/認定情報」に記載した認証番号などは、CONEXIOBlackBear の底面ラベル に「図7.3-1 技術基準適合証明/認定情報 – 底面ラベル」のように記載してありますので、必要に応じてご確認く ださい。



図7.3-1 技術基準適合証明/認定情報 - 底面ラベル



7.4. オープンソースソフトウェアに関する注意事項

CONEXIOBlackBear の工場出荷時に標準搭載されているソフトウェアには「表2.6-1 OS および 主なPre-i nstalledソフトウェア」に掲載したものをはじめとするオープンソースソフトウェア(OSS)が含まれています。

これらのOSSには、それぞれの著作権者によってライセンス条件が定められており、CONEXIOBlackBear を 購入していただいたお客様にも、定められたライセンス条件を遵守する義務が有ります。

これらのOSSのライセンスに関する詳細については、CONEXIOBlackBear サポートサイトの「Yocto Project - Board Support Package (BSP)」に記載してある注意事項を参照して下さい。

ソースコードを入手し、それぞれのOSSで定められたライセンス条件に従って、改変、再配布などを実施する 場合は、お客様の自己責任で実施して下さい。

これらのOSSは現状有姿(AS IS)にて提供され、それぞれのOSS自体に対してはいかなる保証も提供されません。またOSSソースコードの内容そのものに関しては、いかなる技術サポートも提供いたしません。

なお、お客様が CONEXIOBlackBear の工場出荷時に標準搭載されているソフトウェアを改変した場合は、 製品保証の対象外となります。改変する場合は全て自己責任にて実施して下さい。

オリジナルのi.MX BSPの入手に関しては、下記リンクのNXPサイトを参照願います。

NXPサイトURL:

https://www.nxp.com/design/i-mx-developer-resources/i-mx-software-and-development-tools:IMX-SW

7.5. 海外での使用について

CONEXIOBlackBear には日本国内の"技適"や"PSE"だけではなく、世界各国・地域の電波関連法規や製品 安全に関する認証を取得したモデルが有ります。対象国・地域の周波数に対応したLTE Moduleが搭載されており、対象となるそれぞれの国・地域の認証を取得してあります。

本書では"SIM7600JC-H"を搭載した国内向けモデルを念頭に置いた記載をしておりますが、LTE Moduleの 対応周波数、WiFiの対応channel以外の CONEXIOBlackBear の構成は、各国・地域対応モデル間で同一で す。したがって、日本国内で開発したシステムを再開発することなくそのまま海外展開することが可能ですが、必 ず使用する国・地域での認証を取得したモデルを使用して下さい。

認証取得済の国・地域に関する最新情報については下記URLの情報をご確認下さい。

URL: https://conexio-iot.jp/serviceproduct/blackbear_faq.html

使用する国・地域に対応した認証取得済モデル以外を使用した場合の製品保証は一切できません。また使用 した国・地域において法律により罰せられることがあります。

CONEXIOBlackBear を輸出する場合は、日本国および関連する国・地域の輸出入関連法規を遵守し、必要 な輸出入手続きを取って下さい。



7.6. 保証事項

CONEXIOBlackBear に添付または下記URLに記載した「CONEXIOBlackBear 保証規定」にしたがって保証を行います。

URL: https://conexio-iot.jp/serviceproduct/blackbear.html

保証範囲、保証期間がございますので内容を確認してご注意下さい。

※注意※

CONEXIOBlackBear底面の4か所のネジ穴のうち1か所に「図7.6-1 TAMPER SEAL」に記載したシールが 貼られています。このシールはCONEXIOBlackBearの分解・改造等が不正に行われることを避けるためのも のです。このシールを剥がしたり破ったりするなど破損させた場合は、保証期間内でも保証対象外となります のでご注意ください。

CONEXIOBlackBearの分解が必要になった場合は、「8. お問い合わせ先」にご相談ください。



図7.6-1 TAMPER SEAL



8. お問い合わせ先

コネクシオ株式会社 法人スマートサービス部門 IoTソリューション部 IoT営業課 〒160-6137 東京都新宿区西新宿8-17-1 新宿グランドタワー37階 TEL.03-5331-3677